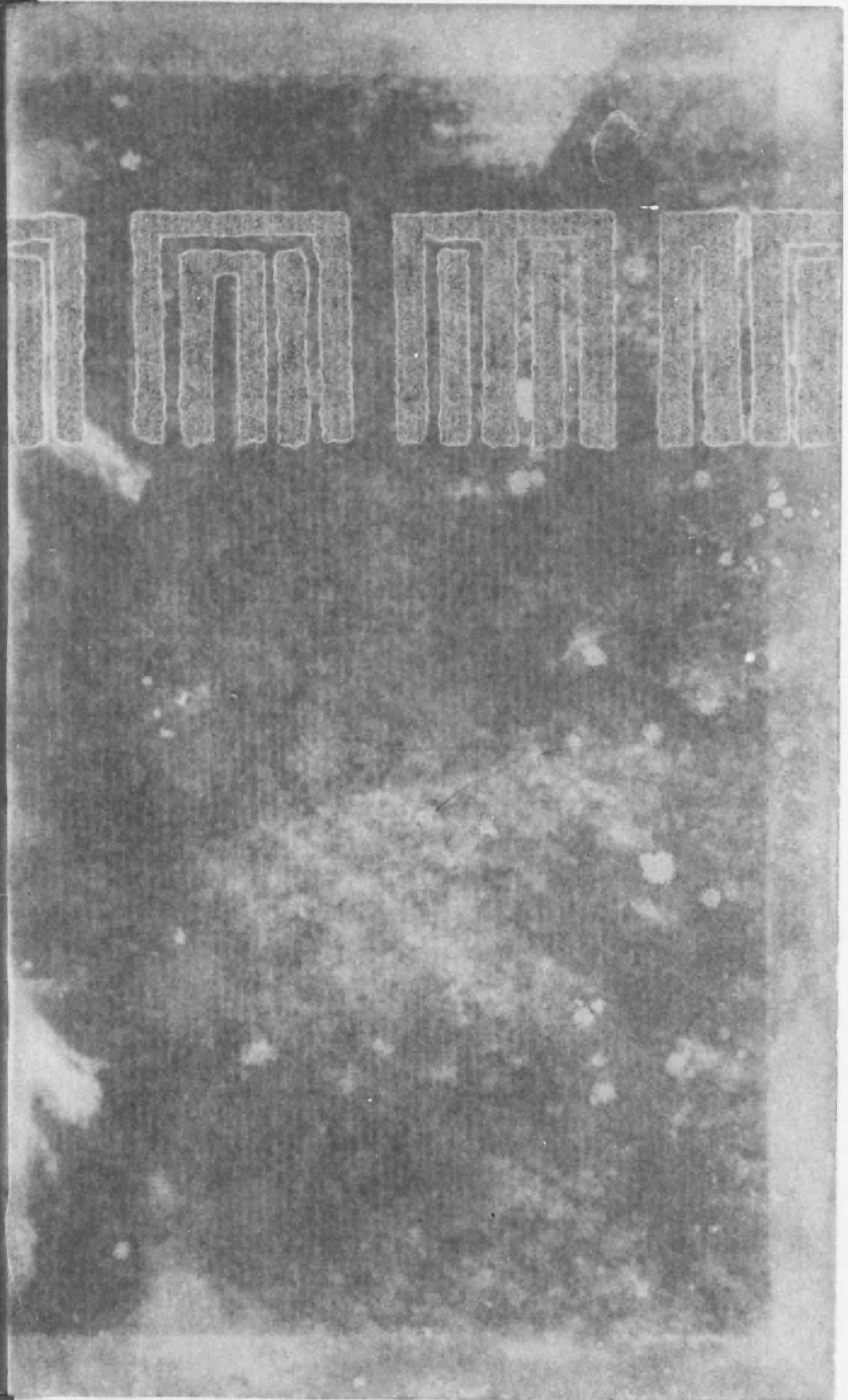
350-414
1200601241070

始

源氏の人々



「源氏の人々」は、曩に出した「平家の人々」の姉妹卷です。傳説に現はれた源氏の人々について、折々の感想を托した斷片にすぎませぬ。主として大正二年四月から大正三年六月迄の收穫を集めたものです。

一千九百十四年夏　高須梅溪

350
414

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200601241070

目次

○悲痛のSymbol……一
RomanticistのMelody（爲朝）……九
○功名と罪惡の塔（義朝）……二九
先驅者の死（頼政）……四九
自己中心主義者の生涯（頼朝）……六九
赤き情熱のRomance（義經）……八九
北國の颶風（義仲）……一二三
○死滅しゆく愛の悲み（大姫君）……一四一
詩の光と暗黒（實朝）……一五三

○呪はれたる黑衣の公子（賴家）……………一七三
○不思議な女性（常盤御前）……………一八九
愛と力（政子）……………二〇一
淋しき犧性（範賴）……………二二一
復讐より亡滅へ（公曉）……………二三七
○戀の贖魂（靜御前）……………二五三

悲痛のSymbol

悲痛の Symbol.

「人生は悲痛の Symbol. である。私等は、喘ぎ〳〵淋しい哀愁の峠を辿る旅の子である。其の途中には、歡樂の泉も湧いて居るであらう。甘美の詩の夢を貪る樹蔭も見えるであらう。名譽や、戀情や、財寶の甘き誘惑をも見出すであらう。けれども其處に踏み止つて之を永遠に領し得るものは、絶無である。哀愁の峠を行く旅の子が、暫時立止つて、歡樂と榮光との泉を酌むのも、眞に一瞬間である。ハッと吾

にかへつて自覺の眼を開くと、矢張、哀愁の影から逃れ得ることが出來ない。私等は、悲痛の重荷を負うて、嶮しい坂道を行く旅の子である。

源家一門の歷史を讀むとき、私は斯うした感じが痛切に身に沁むのである。彼等は最初から、痛哭すべき悲痛の使命を帶びて生れ出たのではあるまいかと思はれる。彼等の多くは、美しい假面の下に潛める現實の醜惡におびやかされなければならなかつた。彼等の或者は、美しい詩の夢に憧憬れ、或者は、蜜のやうな戀情の誘惑に身心を浸したがそれも永く續かなかつた。肅殺の氣を含んだ運命の魔神は間もなく、彼等に幻滅の悲しみを味はさねば措かなかつた。

彼等は、最初から非人情を事實の上に現はさうとする殘虐な考へを持たなかつた。けれども周圍の事情は、彼等をして暖かい人情を蹂躙るやうに迫つた。彼等は、衷心から悲痛を咀ひ乍らも、悲痛の旅の子たることを免れ得なかつた。

一度、幻滅の悲しみを味はつたものは、到底、甘美な安らかな夢を頌ずる事が出來ない。其の見る夢は、屹度凄い夢、恐ろしい夢、咀ふべき夢である。源家の一門は、何れも此の種の夢に襲はれた。之とは異つて、平家の一門は、如何なる場合にも、甘美な詩の夢を貪ることが出來た。彼等が歡樂の魔酒に惑溺した時も、沒落して漂泊の生涯に入

つた時も、幻滅の悲しみを離れて、詩美に滿ちた淡い夢の中に心身を遊離させる事が出來た。必竟、平家の一門は、藝術的氣分に豐かなものが多くて、一門打揃うて、暖かい人情の海に呼吸する事が出來たからであつた。

けれども源家の一門には、賴政、賴家、實朝等を除いては藝術的氣分を持つものがなかつた。其の多くは、悲痛に滿ちた現實の坂道を辿つて、緊張した心の狀態を持續しつつ長く飽滿愉悅の境地に止ることが出來なかつた。彼等の多くは、擴充せんと熱望した自我の分裂に依つて、幻滅の人生に面して、苦慘な運命の犧牲となつて倒れた。常に勝利の金冠に憧憬れ、力強い鐵腕を誇りつゝも、敗滅の淵に

陷つて、再び起つことが出來ぬやうな無殘な目に逢つた。美しい假面を撤去した現實の姿は、彼等をして『呪ふべき惡魔よ！』と絕叫せしめたであらう。

恐ろしい內部の爭鬪！　此の事は、最初から源家一門に附き纏ふた惡緣であつた。之がため、義朝は、其の父を殺し、愛らしい弟達をも刃の下に滅亡させねばならぬ悲痛を見た。勇武の權化とも云ふべき義經や、義仲は、賴朝の呪ふ所となつて、悲慘な末路を遂げた。其の勝利の凱歌を揚げた賴朝さへ、子孫をして平安の道を步ましめることが出來なかつた。賴家は、冷かな北條のために葬られ、實朝は、公曉の刺殺する所となつて、源家は、僅かに三代で亡

びた。之を夢としたら、恐ろしい夢、凄い夢、呪ふべき夢
である。

悲痛は、それが自ら詩歌の泉となつて居る。源家一門の悲痛な歴史は、彼等をして、深酷に幻滅の悲しみに浸潤させたが、現代に生息する私等は、此の悲痛の歴史に、執着の熱情を寄せざるを得ない。私等は人生を悲痛の Symbol と見て居る。其の悲痛のドン底に沈んだ源家一門の人々は、浮薄な歡樂の子が味ひ得ない人生味を感得したのである。斯うした沈鬱な境地に心身を浸さなければ、眞の人生は、到底、味識されずに終るかも知れない。私等は、罪惡の

子義朝の心境を透見して、其の憎惡の一面を呪ひつゝも、又一面から之を憐む事切なるものがある。私は此に源家一門の哀史に就て、自然に湧き出た感懷の一部を記すであらう。

Romanticist の Melody

Romanticist の Melody

（源　爲朝）

　現實の單調と醜惡とのみに惱まされると、人は次第に其の身心の委靡を感じて、苦い欠伸のみ頻出するのである。斯うした場合には、總ての見るもの、聞くものが、唯嫌惡の感じを喚起すに過ぎない。何となく現實に裏切りしたいやうな心持になる。眼に見えざる神秘な現象、耳に聞えざる神秘な音調、左樣したものに觸れて見たいやうな氣分が、切に起る。何となく Wonder に對する渇仰の情が、心の底

から湧いて來る。
爲朝は、古きRomanticistであつた。彼は近代人のやうに敏感ではなかつた。彼は、眼に見えざる色や、耳に聞えぬ音を求むるほどに鋭い神經を持つて居なかつた。けれども彼の胸には強いCuriosityの情緒が、絶えず湛えられて居た。彼は、平凡を呪つた。單調を憎んだ。Wonderfulな事象を求めて漂浪せんとする精神が、絶えず彼を支配して居た。之がために、彼の行動は、野に放たれた猛獸のやうに、極端に自由で大膽であつた。彼は驚異から次ぎの驚異を求めて歩くRomanticistであつた。恰度、南洋の一孤島Tahitiに遊んだゴオガンのやうに。

爲朝の生涯は、早くから漂泊を以て始まつて居る。彼は、幼少の時から、何物にも拘束せらるゝのを好まなかつた。超凡な器量と、力とを有する彼は、兄も母も時としては其の父さへも認めないやうな放埒な態度を示した。溫和しい父は、自分の手許に置くことを恐れた。彼の放埒を懲すため一時、勘當して九州の方へ追ひ下した。それは爲朝が未だ十三歳の時であつた。
爲朝は、却て父の勘當を喜んだ。彼は不自由な拘束の多い父の家に居てConventionalな形式に支配せられるよりも、

自由な境地に冒險を試みて、彼の思ふ通りな生活をしたいと望んだ。好奇に輝く少年の心には、初めて見る途中の風景や、特殊の習俗が、興味の多いロマンスを展げられるやうに思はれた。彼は、漂泊の旅を愛しつゝ九州に下つて、豐後の地で新しい生活を始めた。

彼は、此に初めて廣い自由の天地を見た。優しい處女のやうな京洛の風光にくらべると、原始的の巨人が嘯いて居るやうな奇聳な九州の山水風光は、豪健を喜ぶ爲朝の心を魅した。彼は好奇の眼を瞬つて、周圍を眺めた。彼の征服心は自然に其の巨手を伸べしめて手當り次第に土地を奪掠した。彼は前後二十餘回の戰ひに一度も敗北せず、三年の

努力を續けて、九州を統一した。九州の人々は此の驚くべき事實に向つて、最早反抗さへしなかつた。十五歳の少年は、到頭自分から九州總追捕使となつて、あらゆる放埒を盡した。此の事が、何時か香椎宮に居る宮司から、京の朝廷に報ぜらるゝに及んで、急に爲朝に上洛を命ぜられた。けれども爲朝は、少しも其の命を奉ぜずに、奔放な意氣にまかせて、恣に周圍を壓しつゝあつた。彼は思つた『自分は自由の人である、自分が愛するのは、大膽な自由の天地である』と。

けれども爲朝が朝廷の命を奉じないために、其の影響はやがて父爲義に及んだ。仄に聞くと、父は子の罪を引受け

て檢非違使の職を奪はれたやうである。それを素知らぬ顔して過ごすのは、何となく卑怯のやうに考へられた。『それならば自分が京に歸つて、其の罪を受けよう、父を元の通りに復職するやうにせねばならぬ』と考へた。彼は『假令、如何なる刑罰を受けるとも、甘んじてそれに服從しよう』と決心した。彼は、其の征服した自由の天地に別れて郎黨二十八騎を從へつゝ、上京の途についた。爲朝が保元の亂に勇ましい働きをしたのは、それから間もないことである。

當時の九州は、都の人々にとつて、親しみのない荒寥な

天地のやうに思はれて居た。未だ若々しい爲朝が、其處に根據を据ゑて、獨立の王國を築いたやうに、權力を恣にし居ると云ふ噂は、不思議な色彩を帶びたロマンスとして人々の間にそれからそれへと傳へられた。其の噂の主人公が、屈強な二十八人の從者を從へて傲れる態度を示しつゝ京に引かへした時、人々は、好奇の眼を瞬つて、九州の風に吹かれた彼の黑き顔を仰いだ。

爲朝は、其の父が、表面に冷嚴を裝ひ乍ら、胸の底には暖かい心を以て彼に對するのを見た。横暴の限りを盡した彼も、此の老いたる父の事を思ふと、何となく今迄の行爲が餘りに父を惱ましすぎたやうに感ぜられた。彼は漸く其

の態度を改めて、放埒な子を思ふ父の心を安んじようとした。
　其の中、保元の亂が起つた。爲朝は、父爲義に從つて、崇德上皇の御味方に馳せ參じた。彼の風采は、注視の焦點となつた。其の七尺に近い偉大な體軀、爛として輝くやうな瞳、逞しげに引緊つた筋肉は、一瞥して、其の非凡の勇士なることを思はせた。彼が五人張の强弓を携へ、三十六差した黑羽の矢を負ふた樣子は、如何な强敵も取挫ぐやうに見えた。而して彼の部下にある二十八騎も亦、鬼をも恐れぬ面魂であつた。

　爲朝は、賴長から戰略を尋ねられた時、壯氣を帶びた聲で、無造作に夜討を勸めた。それは、痛切な彼の經驗に基いたのである。けれども賴長は、爲朝が武骨な外皮の下に、精確な戰術を有することを見逃した。賴長は、冷やかに之を聞いて直ぐに用ひやうとしなかつた。爲朝には、兄の義朝が、自分と同じ戰略を用ひるにちがひないことが、ハッキリ想像せられた。『此の上は、唯潔く戰ふより他に仕方はあるまい』と決心した。戰爭に迂遠な賴長は、敵が急に押寄せたのを見て狼狽しつゝ、突然爲朝を藏人に任じた。爲朝は唯實力を愛して、形式や位階を認めなかつた。『矢張

元の鎭西八郎の方が滿足で御座ります』と速座に辭退した。

彼は、最初から敵の力を認めて居なかつた。『假令敵が潮のやうに押寄せても、自分の鎧の袖が一度、彼等に觸れたら、氣絕するであらう』言つて居た。此の自負心は、彼をして唯二十八騎を從へて、白河殿の西門を守らせた。彼は其の不敵の武勇を現はすべき機會が、眼の前に逼つたのを喜んだ。

彼が戰場に於ける華やかな武者振は、敵も味方も、一齊に之を讃嘆しないものはなかつた。最初に爲朝に挑んだ伊

藤五、伊藤六の二人は、早くも爲朝のために血祭りの犧牲とせられた。伊藤六は、鎧の胸板を射貫れて卽死した。伊藤五は僅かに生命カラ〳〵逃げのびて、爲朝の强勇に舌を捲かんばかりに驚いた。其の後に現はれた剛勇の名ある山田小三郞さへも爲朝に睨まれて、唯一矢の力で、見苦しくも馬から眞逆樣に落された。

最初から爲朝を眼下に見た兄の義朝は『弟の奴め、假令强くとも馬上の技にかけては、坂東武者に及ばぬぞ』と豪語して、爲朝に戰ひを挑んだ。けれども爲朝の强弓は、義朝が見る前で、其の敵の多くを倒して魔術のやうに、神速奇警を極めた。爲朝は、今眼の前に部下を指揮する兄を

見て、其の內兜を射るべき機會に出逢つた。憎むべき兄の暴言に對して其の呼吸の根を止めやうと激昂したが『今、親子兄弟が敵味方と別れて爭つても、愈々勝敗が決せられた時、何れか助け合はねばならぬ、それを思ふと、兄の生命を取ることは出來ぬ』と思ひかへして、故に義朝を見逃した。

けれども義朝は、『此の兄の武者振を見よ』と言はぬばかりに爲朝を嘲つた。今までヂッと胸を抑へて居た爲朝も、『此の上は自分の手練の冴えを見せよう』と決心して、義朝の方に向つて矢を番つた。それと見て敵の中から深巢清國がッと現はれて、義朝の馬前に立塞がつた。爲朝が放つ

た矢は見事に清國を貫いた。如何なる勇士も爲朝の覘ふところとなれば、最早、危險から逃れることが出來なかつた。

爲朝が最初から憂ひて居た敵の夜討は、急激に行はれた。爲朝以下の人々も大勢の赴くところ、如何することも出來なかつた。思ひ〳〵に四散しゆく敗北者の運命は悲慘であつた。爲朝は一人踏み留つても、戰局を一變することが出來ぬのを思つて、氣分を一轉して新たに自由な天地を開拓するために、一時、其の後を晦した。

彼は、敵の眼を忍んで、暫く近江輪田に隱れて居た。其

處から彼は再び九州へ歸る積りで居たが、何時か病のために、非常に元氣が衰えたので、日毎に、湯を浴びて、其の回復に力めた。彼が浴場に於ける逞しい姿は何日か敵の發見する所となつた。其の偉大な體軀と、物凄い額の古傷は、彼が非凡の勇士なることを想せた。斯うした特徵が原因となつて、彼は不意に三十餘騎の武者に取圍まれた。それと見て荷ひ棒を取るより早く敵を惱ましたけれども、重い病のために、身體の自由を妨げられて、到頭取押へられた。けれども彼が絕倫の勇氣は總べてに愛せられたので、生命だけ助けられて、伊豆の大島に流さるゝ事になつた。

「久しく自由に憧憬れた彼が、自由の風が吹く大島にゆくことを如何なに喜んだであらう。彼は、自分から進んで大島に渡つた。其處に再び彼の巨手を以て新しい天地を開かうとした。」

「當時の大島は、不思議な世界のやうに思はれて居た。三原山から立のぼる噴煙は、恐しいものゝやうに傳へられたであらう。軟かい南風が吹くときは、雲のやうに噴き出る湯氣の暖かさ、斯うした空氣に包まれて、日毎に青い海を望みつゝ生活せる島の女の胸には、情熱の戀が宿つて居たであらう。」

爲朝は、此の大島に流竄せられて、總て特殊の色彩を帶びた風光が、彼の感覺を新しく刺戟するのを覺えた。其の

露光量違いの為重複撮影

素朴な自然に從ふ生活は、何となく、快い感じを與へた。

「ゴオガンの〝Noa Noa〟の中に描かれて居る王妃マラーユの再現のやうに、容儀の正しい立派な姿態と、夢みるやうな情熱に燃る眸と、地に垂れんばかりに長い艶々した黑髪とを持つて居る島の女の美は、爲朝の愛着を喚起したであらう。」

爲朝は、暖かい大島に來て元のやうに健全の身となつた。彼の奔放な意氣は、九州に於ける時代と同じやうに彼の覺醒を促した。彼が『八幡太郎の孫だ』と云ふ誇りは、彼をして其の愛する大島を初め、新島、三宅島、神津島、御藏

露光量違いの為重複撮影

素朴な自然に從ふ生活は、何となく、快い感じを與へた。ゴオガンの〝Noa Noa〟の中に描かれて居る王妃マラーユの再現のやうに、容儀の正しい立派な姿態と、夢みるやうな情熱に燃る眸と、地に垂れんばかりに長い艶々した黑髮とを持つて居る島の女の美は、爲朝の愛着を喚起したであらう。」

爲朝は、暖かい大島に來て元のやうに健全の身となつた。彼の奔放な意氣は、九州に於ける時代と同じやうに彼の覺醒を促した。彼が『八幡太郎の孫だ』と云ふ誇りは、彼をして其の愛する大島を初め、新島、三宅島、神津島、御藏

島を其の武力の下に統一せしむるに至つた。彼は『蠻民の畫家』ゴォガンがタヒチに於て土民の一少女を娶つたやうに、島の代官三郎太夫忠重の娘を迎へて、其處に平和な十年の日子を夢のやうに送つた。けれども平凡單調を咀ふ彼れは、島の平和な生活が、何となく、倦怠の種となつた。

彼は、倦怠の生を堪へ難きものに思ひ乍ら、獨り磯の邊に逍遙して居たが、不圖、白鷺青鷺が前後して、沖の方へ飛びゆくのを見た。『此の鳥の行方には、必度新しい未だ見ぬ島があるにちがひない』と云ふ思想が閃光のやうに浮んだ。彼は、其の未だ見ぬ島を發見するため、急いで船に乗つて、夜中海の上をゆくと、曙の色が東の空にほのめく

頃、吼ゆるやうな浪の上に、巖石に蔽はれた異國情調の漂ふ島の姿を見出した。

爲朝は、其の豫想の通りに不思議な一孤島を發見した事を喜んだ。島に上陸すると、最初、爲朝の眼に映つたのは、全身に毛の逆立つたやうに見ゆる色の黒い眼の光つた少年であつた。其の身長は、一丈に近かつた。爲朝の從者は、不思議さうに、其の少年の顏を見つめた。爲朝には、此の半人半獸の如き少年の態度が、全く別の世界に住む原始的の人間であることを思はせた。彼は其の少年の口から島の生活について聞いた。其の原始的な方法が、新しい興味の種となつた。彼は先づ其の武力を示すために、眼界に入り

來る島を一々射落したので、島の人々は其の恐しい力に魅せられて、彼の前に跪づいた。

爲朝が上陸したのは、鬼ヶ島であつた。島の者は、爲朝に其の祖先が鬼神であると云ふ傳說を話した。昔は、隱簑、隱笠、浮履、劍などの寶があつたと云つた。爲朝は、此の鬼ヶ島に、葦島と云ふ新しい名を與へた。而して每年必ず爲朝の許に年貢を納めることを盟はせた。彼は、最初に見た恐しい少年を伴うて、歸途についた。

「爲朝が、鬼ヶ島の發見は、彼の生涯に種々の色彩を加味

せしめた。其の鬼ヶ島は、琉球であるまいかと想像せられて居る。何れにもせよ爲朝が、琉球に渡つて王女を娶つたと云ふ傳說は、ロマンチストとしての彼にふさはしいやうな氣がする。其處には、南洋から吹いて來る暖かい風が、自由を囁いて居る。芳烈な美酒、鮮明な色彩の野花、異國情調の漂ふ建築の魅力、豐艶な女性の戀、斯うした背景の中に、爲朝と云ふロマンチストの生涯を思ひ浮べると、不思議な誘惑を感ずるのである」。

功名と罪悪の塔

功名と罪惡の塔

（源　義　朝）

人生に於ける重い悲みの道を歩んだ人の中で源義朝の名は、深く何人の胸にも、印象されて居る。若し彼の表面のみ見れば、彼は冷やかな惡魔のやうな點がある。功名野心の爲め、假令自分が手を下さずとも、其の父と子と可憐な弟達の生命とを犧牲にしたのは、餘りに殘忍である。彼が罪惡の人として、永久に墳墓の下に横はつて居るのは自然の應報である。

「私は義朝の生涯に就て、斯う云ふ事を想像して見た。彼は、最初から、惡魔に咀はれて生れたのである。彼の周圍には多くの眼に見えぬ魔女が四方から群つて、彼の身に早く禍が生ずるやうに祈つて居たのではあるまいか。義朝は、此の魔女の導くが儘に、幽暗な冷たい空氣が籠つて居る罪惡の塔に一歩、足を踏み入れると共に、最早、後へ引きかへされなくなつて、次第に其の塔の頂上に昇つて至つて、終に其の塔上から、一身を地上に投げたのではあるまいか。其の塔に佇立んだ時、義朝は、鋭い眼を見張つて、魔女の誘惑から遠ざからうとしたが、彼の反抗も力なくして終つたのではあるまいか。黒衣の魔女達は、亡びゆく義

朝の姿に手を拍つて喜んだのではあるまいか。私は斯う想像して見た。而してミリエル僧正が、ジャン、バルジャンを見た暖かい心眼を以て、義朝の一生を見た時、何となく悲みのドン底に陷つた彼の灰色の運命を憐まずには居られなかつた。」

「暗い時代の空氣は、暗い人物を生まずには措かない。保元平治の大亂があつた時代は、陰慘な空氣が、教養ある人人の間にも瀰漫して居た。父と子と、兄と弟と、爭ひの矛を磨いて、暖かい人情の花を蹂躙ることを、何とも思は

なかつた。Egoistic な思想と、惑溺した感情とは、相剋して、多くの悲劇を産出した。運命の神に祝福せられたものは、勝利の子となり、運命の神に咀はれたものは、敗北の子となつて自然に亡びた。斯うした空氣の間に活動した主要な人物が、大抵、暗黒の人物として、記憶せらるゝのは、自然の勢であらう。覺醒した哲人でない限りは、如何しても、此の時代の大波に巻き込まれざるを得なかつたであらう。

「義朝は、武人として、當時の第一人であつた。其の軍略、勇氣、嚴冷峻峭な風格は、坂東武者の代表として、恥しくなかつた。けれども彼は、それと共に、功名心が人一倍に

強かつた。之がためには、何物をも犧牲に供することを辭せなかつた。此の功名に渇する心が、やがて彼をして、保元の亂に第一の手柄を爲さしむると同時に、其の父も弟も、子さへも功名の犧牲として葬らねばならぬ破目に陷つた。彼は、此の悲みのドン底に陷ることを抑制せんとして焦慮り、もがいたに關らず、ズル〳〵底の方へと引込まれて至つた。魔女に誘惑されたマクベスのやうに――」

當時の武人は、平和を愛するよりも、戰爭に憧憬れた。平和が永く續くと、彼等は、其の鐵腕を撫して、功名の機

會なきを嘆いた。殊に功名に渴した義朝は、彼の兵略と勇氣とを現はすべき機會の來ることを待つことが一層切實であつた。其の機會は、保元の亂の爆發によつて、先づ彼の起つことを促した。彼は、後白河帝の方に召し出されて、其の御味方となつた。「此の時、功名の情に溢れた彼の胸は、やがて飛躍の春が來るべきを豫期して、晴れやかな喜びの眉を動かしたであらう。けれども其の喜びの裏には、恐るべき灰色の惡運命が、早くも彼に附き纏うて居たのに心づかなかつた。」彼の父爲義は、義朝が後白河の御許に馳せて、忠誠を誓つた事を知らずに居た。而して義朝が、後白河帝の御許に召されてから、程經て父爲義は、崇德上皇の命を

奉じて其の御味方となつた。爲義は最初、義朝をも味方の一人とすることが出來ると豫期して居た。けれども義朝が早くも後白河の方に赴いたのを聞いて、流石に肉身の愛と失望の情とに打たれて戰爭の圈外に起たうとした。若し此の事が實現されたら、父と子とが、敵味方となる悲みを見ずに濟んだであらう。けれども崇德上皇が屢々爲義を御召しなされた爲めに、我子と敵となることを悲み乍らも、知己の恩に感じて、終に忠誠を盟ふに至つた。此の時、爲義は、既に生命を拋つ覺悟を極めて居た。彼が義朝の許に、重代の鎧を贈つたのは之を最終の紀念とするためであつた。鎧を受取つた義朝は、驚きの眼を睜つた。肉身の父が、

吾が敵となつて、見るも苦痛な生死の巷に爭ひをせねばならぬとは、何と云ふ悲しい事實であらう、如何に武人として、戰爭に全心を傾けることが、避け難い使命とは云へ、これぱかりは、餘りに痛慘なことだと、嗟嘆せずには居られなかつたであらう。けれどもそれは既に遲かつた。父と子とは、東西に別れて、敵味方として其の勝敗を決しなければならぬ場合となつた。

　勝敗は、一擧に決せられた。不幸にも爲義の軍略は、惡左府頼長のために用ゐられなかつたので、見る〳〵其の敗

北に陷ることを自覺しつゝ、義朝の夜襲を待たねばならなかつた。果然、義朝の策は、後白河の御前に用ゐられて、白河殿夜討の一策は、巧に爲義の方に打擊を與へ、之によつて、義朝は、其の功名心を滿足せしめた。けれども此の事は、義朝に取つて幸福ではなかつた。彼の功名は、其の實質通りに酬いられなかつたのみならず、勅命によつて、其の父を斬り、可憐の弟をも刃の露とせねばならぬ悲みに出逢つた。如何に冷嚴峻峭な義朝も、之ればかりに根柢から腦髓を霍亂せられるやうに重苦しく感じた。彼は如何にかして、父の生命を助けたいと焦慮つて、再度、宥免を奏請したが、到頭、許されなかつた。『清盛さへ其の叔

父を斬つた以上は、汝も天下の罪人たる父を斬り得ぬことはあるまい、若し此の命を奉ぜぬとあらば、他の者に命ずるであらう』と迫られた。今は絕體絕命、義朝も勅諚に兇くことが出來なくなつて其の臣鎌田次郎に命じて、到頭、父の首を刎ねしめた。此の悲劇に逢つても、義朝の功名心は、彼をして父の後を追うて、自殺せしめなかつた。彼は、ヂッと其の頭上を壓する重き悲みを堪へ忍んで、源家の位置を進めることに熱中するのを忘れなかつた。此の時、彼は其の淸白な生涯に拭ふことの出來ぬ一大黑點を印した。

義朝の功名心は、更に彼をして、朝命の儘に、賴賢、賴仲以下數人の弟達を刃の露とならしめた。此の悲みをシミ〴〵と身に沁み入るやうに感じた彼は、熱湯を飮むやうな心持をヂッと抑へて、尙ほ功名の一念を擲たなかつた。彼は、總ての悲みを避け難い運命とあきらめて、更に其の前途の躍進を思ふた。絕えず、平家の出世に劣らざる位置に到達せんとする熱望を持つて居た。而して此の功名心が、やがて彼を自滅せしむる原因となることを意識しなかつた。

「憐むべきは義朝の執着心である。彼の老父の死を見乍ら、之を助け得ず、其の弟達の亡滅を見乍ら、之を救ひ得ずして、何の功名があらう、何の躍進があらう。總ての名譽、

露光量違いの為重複撮影

官爵は、果敢ない幻の花ではないか。既に自滅の運命が、ヒシ〳〵と彼を取巻つゝある最中、尚ほ一人踏み止つて、功名に憧憬れたとても、それは一瞬間の淡い〳〵夢に過ぎない。けれども心靈の糧に就て要求するところなき彼は、唯一心に源家の興起のみに目を注いだ。彼が犯した罪惡については、左程、懊惱することが少かつたやうに見ゆる。憐むべき功名心の權化よ。

義朝が、父を殺し、弟を葬つた罪惡に向つては、やがて恐ろしい應報が來ずには措かなかつた。平治の亂は、即

露光量違いの為重複撮影

官爵は、果敢ない幻の花ではないか。既に自滅の運命が、ヒシ〳〵と彼を取巻つゝある最中、尚ほ一人踏み止つて、功名に憧憬れたとても、それは一瞬間の淡い〳〵夢に過ぎない。けれども心靈の糧に就て要求するところなき彼は、唯一心に源家の興起のみに目を注いだ。彼が犯した罪惡については、左程、懊惱することが少かつたやうに見ゆる。憐むべき功名心の權化よ。

義朝が、父を殺し、弟を葬つた罪惡に向つては、やがて恐ろしい應報が來ずには措かなかつた。平治の亂は、卽

ち義朝に對する罪の罰として現はれた。彼は、保元の亂に於て、花やかな功名を爲したに關らず、却つて清盛よりも劣つた位置に据ゑられた。而して其の父と弟とを涙の中に犧牲としたに關らず、何等の躍進を見ることが出來なかつた。辛うじて左馬頭となつたに過ぎなかつた。而して清盛が公卿の間に一勢力となれる時、義朝は、武骨疎野の人物として、冷やかな侮蔑の視線を注がれた。流石に重い悲みに隱忍した彼も、冷淡酷薄な周圍の事情に向つては、憤炎を洩らさずには居られなかつた。彼は無分別にも、賴み難い信賴と結托して、平治の亂を爆發させたのである。之れ彼が、其の悲慘な最後に向つて急ぐ第一步であつた。

罪惡の塔に登つた義朝は、何時か其の應報を受けねばならぬ事を覺悟したかも知れない。けれども彼は、其の心の中に、現在、其の肉身の父と弟とを犧牲に供せねばならぬ悲哀を印象され乍ら、尙ほ一方に烈しく燃ゆる功名心に其の悲哀の感じを打消されたやうである。而して平家の一門と對抗して、其の上に頭角を擡げようとする一念に驅られて、次第に彼が目前に見た悲劇の記憶から遠ざかつたかも知れない。それ程に、彼は功名に急であつた。

平治の亂は、最初から、敗北の運命を豫知するに充分であつた。底力のない信頼を主盟者と仰いだのは、既に義朝が滅亡に向つて、一歩を轉ずる最初であつた。それに内部

からの分裂——源頼政の裏切——によつて、義朝は、其の進退の中心點を失つて、四分五裂の狀態に陷つた。機運は、平家に幸して、源家の人々に禍した。戰ひの人として、當時、獨歩の姿があつた義朝も、彼よりは、一段、弱い者に追窮せられる破目を見た。彼は、此の時、潔く平家と戰つて、悲壯な最後を遂げねばならなかつた。けれども功名心の權化とも云ふべき彼は、尙ほ其の危急の中に、辛くも一命を全うして、ヂッと隱忍し乍ら、再擧を計らうとした。彼の心は、切に平家を咀うて止まなかつた。如何にしても、之を顚覆して、權勢の中心から驅逐しようと焦慮するのみであつた。

憐れなる義朝よ。彼は、刻々に彼の身邊に迫りつゝある死の運命を豫知し得なかつた。敵の眼が八方から義朝を睨む間を潜り拔けて尾張へ行く途中、彼は其の子朝長の怯懦なるを憤つて、之を刺殺したとさへ傳へられて居る。彼が其の父と弟とを助け得ずに、地下の人とならしめた應報は、今、其の子の身の上に來り、やがて彼自身を幽冥の境地に誘ふ前兆として現はれた事を知らなかつた。斯うした場合にさへ、彼は尚ほ源氏の再興を夢みたのである。見渡す限り、義朝の敵を以て滿たさるゝ中に、彼は、心

細くも、其の臣鎌田政家の云ふが儘に、尾張に入つて、長田忠致に依つた。忠致は、政家の妻の父である。情誼の上から云へば、義朝を保護すべき立場に居る。けれども當時、源氏の勢力は、四方に分裂して、統一されないので、平家の勢のみ獨り旺であつた。利に敏い忠致は、早くも義朝を自家の功名の犧牲にしてやらうと決心したのである。義朝の生命は、今、正に一縷の微光の如くに見えた。けれども義朝自身は、尚ほそれを直覺しなかつたやうである。此の時にも、尚ほ彼は源家の勢力を盛り返へさうとのみ思ひ惱んで居たやうである。其の結果は、忠致の誅する所となつて、終に暖い湯殿の中に誘ひ出されて、名もなき力士の

ために、其の生命を奪はるゝに至つた。而して彼の臣政家も亦、其の主人の跡を追うて、悲憤な最後を遂げた。義朝が夢みた功名は、彼の死と共に、全く消滅して了つた。

「功名心と運命との衝突!!! 義朝の場合は、恰度、それであつた。彼は、功名をのみ目がけて進んだ。途中に於ける障碍に向つては、總べてを押除けて進んだ。暖かい人情さへも、犠牲とすることを甘んじた。父の悲劇、弟の哀愁をも、强ゐて助けようとしなかつた。假令、助け得ずとも、父に殉ずる至情を現はさうとしなかつた。それ程に功名を尊重しつゝ、却つて自分の亡滅を早めて、押し寄せ來る運命の恐しい急潮に卷込まれて了つた。而して彼の名は、罪

惡の人として、永久に歷史のページに印象せられた。憐れむべき功名心の權化よ、恐らく義朝の靈魂は、今も尚ほ良心の呵責に呻吟きつゝ、悲愁の咽びを爲しつゝあるであらう。」

先驅者の死

先驅者の死

（源頼政）

「B君、

私は、昨夜、遲く宇治についた。其の夜は、グッスリ寢て了つたので、何の夢も見なかつた。翌朝、起きると、初秋の空がドンヨリ鼠色に曇つて、今にも霧のやうな雨が降り出しさうに見えた。私の宿は、宇治川に臨んで居るので、サラ〳〵と流れゆく水の音さへ聞える。薄靄のやうな大氣に包まれて、對岸に黄檗山の堂塔が夢みるやうに浮

び出して居る。總べてが、シットリと平和な光景の中に眠つて居るやうで、之が曾て戰ひの修羅地獄を現出した場所とは、如何しても思はれなかつた。私は、何となく、源頼政の生涯について、いろ〳〵に考へて見た。

B君、

總べて人生に於ける先驅者の運命は、悲慘な破裂に終ることが多い。若し其の破裂を恐れたら、到底、先驅者となり得ない。彼等は總べての事物が、朽廢から創新に一轉すべき曙の光を暗示するものである。頼政は、柔順なる人

物であつた。武人として智の分子を相當に持つて居た。彼は、輕擧妄動を好まなかつた。けれども必死の勢は、其の自滅を知りつゝも、未だ運命の旺な平家に反抗した。彼は平家のために其の憤りの感情を挑發せられて起ち上つた。而して何となく、平家の衰兆が、隱微の中にほの見ゆるのを直覺した爲めに、一生を賭して、清盛と爭つた。

當時、源氏の人々は窃にその勢力を蓄へて平家に反抗せんとして居たのである。けれども其の勢力は四分五裂して居るので、統一された平家の勢力に當るには、餘りに微弱であつた。個人としては、可なりに力量を有し乍らも、集團としては、纒まつた抵抗力に乏しかつた。それでも、反

抗の氣は、漸く旺盛となつて、隱約の間に動いて居た。其の人達の意志は、頼政を通じて、此に第一の爆發を見たのである。

B君、

頼政は、聰明な老巧な人であつた。けれども其の文雅な外皮の下には、強い氣象を潜ませて居た。彼は、詩歌の愛慕者であつた。それと共に、武勇の道にも精通して居た。武骨な源氏の人々の中では、寧ろ風流な方面を代表したやうに見えた。義朝が、戰術上に於ける偉大なる才能を有するのみとは、大分、趣を異にして居た。彼の人物には、潤ひがあつた。

義朝は、何處から見ても、智の人ではなかつた。冷嚴ではあつたが、それは武人としての冷嚴であつた。或場合には、直情徑行、其の野性を發揮したことも多かつた。彼が清盛のために亡びたのも、此に原因する處が多い。けれども頼政は之と趣を異にして居た。彼は、武人ではあるが、當時の文化に親しみを持つて、野性的の分子が、除き去られて居た。文藝の敎養を誇りとする公卿の間に立ち交つても、劣るところがない程に婉曲で、義朝のやうに一直線の道を歩まなかつた。彼の人生に於ける歩みは、寧ろ紆余曲

折して居た。その線には、圓味を持つて居た。彼が義朝より後れて亡びたのも、之がためであつた。

B君、

賴政の風流な一面は、詩的色彩を帶びた傳說として殘つて居る。近衞帝御在位の時、夜每に御所の上に一團の黑雲が現はれて不思議な怪物が出た。帝は之れがために御惱みあつて、名高い名僧を招いて、祕法を修せられたが、其の功驗が見えなかつた。乃で之を警護しまゐらせるため、源平兩家の中から特に賴政を選ばれた。賴政は畏まつて、腹

心の郞黨猪早太を從へて、南殿の大床に伺候した。其の時、彼は二重の狩衣に、山鳥の尾で作つた鋒矢二筋と滋籐の弓とを携へて、次第に更けゆく夜の色を仰いだ。と見ると、東三條の森の方から、一團の黑雲が現はれて、瞬く間に、御殿の上に靉靆いた。黑雲の中を透視すると、妖魔に似た姿が、閃くやうに出沒する。賴政は心に八幡大菩薩の加護を念じ乍ら、矢を放つと、手答へがあつて、何物か急に地上にバタリと落ちた。それと見た猪早太は、手早く取押へて、續けさまに九囘、刀を刺し通した。此の物音に人々は驚いて立ち出て見ると、不思議な怪物が倒れて居た。其の頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎に似て、鳴く聲は鵺の

やうであつた。と傳へられて居る。爾來、主上の御惱みは急に御快癒になつて、賴政の手柄に對しては、獅子王と稱する御劍を賜はる事になつた。

　賴政に、御劍を賜るべく、御前の階を半分ばかり下りた宇治の左大臣は、不圖初夏の空に杜鵑の二聲三聲鳴いて過ぐるのを風情あるものに思つた。

　ほとぎす名をも雲井にあぐるかな

と覺えず口吟した。賴政は、畏つて、右の膝をつき、左の袖をひろげて、月の姿を見やりつゝ、

　弓はり月のいるにまかせて

と續けた。彼は、唯に武術の才能が優れて居たのみならず、

詩歌の道にも堪能であつた。男らしい强さの中に、優しい風流の情味をも解して居た。

　B君、

　彼が菖蒲前に對する熱烈な戀は、矢張、傳說として、彼の生涯にロマンチックの色彩を加へて居る。當時の武人は、女子に脆かつた。けれども源氏の人々は、大抵、素朴な生活をして居たので、其の戀に風流な洒脫な點がなかつた。卒直なところはあつたが、優美な點に缺けて居た。賴政は、獨り其の行き方を異にして居た。彼の戀は、熱烈であつた

が、少しも野性的ではなかつた。彼が菖蒲前に對する思慕は久しいものであつた。けれどもそれは、極めてデリケートなものであつた。

菖蒲前は、鳥羽帝の御寵遇深き佳人で、其の清麗な風姿と共に、心も亦高潔であつた。多情な公卿達の中には、頻りに菖蒲前に對する懸想を歌詞に托して送るものもあつたが、何とも答へなかつた。賴政も、不圖した機會で、唯一目、此の女を見たが、其の印象は、容易に消えなかつた。爾來、彼は筆に托して、度々菖蒲前に向つて其の燃ゆるやうな情熱を傳へたけれども、何の返事にも接しなかつた。けれども賴政は如何しても、之を忘れることが出來ないで、

三年の間、誠の戀をこめた手紙を續けて送つた。それでも未だ答へがなかつた。

賴政の戀は、何時か帝の御耳に入つた。乃て菖蒲前を召出して、事實を問はれると、菖蒲前は、唯顔を打あかめるばかりで、二人の間の戀は、鮮かに知れなかつた。やがて賴政を召し出されると、彼は、木賊色の狩衣を着けて、直ぐに伺候した。其の時、帝は、賴政に『菖蒲前に對して忍ぶ戀をしたか』との御尋ねがあつた。賴政は、ハッと恐懼して、面をあげることも出來なかつた。帝は、それを興あることに思召されて、菖蒲前と同樣な裝束をした二人の女を、菖蒲前と共に、賴政の前に出された。而して其の中か

ら、眞實の菖蒲前を見出すやうに仰せられた。流石の頼政も、之には當惑して、唯優麗な女房達を、それとなく見やるのみであつたが、やがて其の感懷を申上げた。

「五月雨に沼の石垣水こえて
何れかあやめひきぞわづらふ」

卽座の Wit は、帝の御感に入つて、菖蒲前は、頼政に賜はることになつた。彼が三年越しの戀は、風流な歌の道によつて、圓滿な解決を得たのである。爾來、彼は菖蒲前と睦じい間柄となつて、其の間に愛子仲綱を設けた。彼の戀は、何處までも美しい戀であつた。

B君、

彼の性格は、一面に於て、優雅なために、平家とも同化することが出來た。公卿にも愛せられた。けれども彼は、源氏の復興を忘れなかつた。彼が平家を倒すべき時機が、容易に熟しないのを見て、一時、その外皮に於て、同化したのである。彼が平治の亂に、義朝に裏切したのは、卑怯のやうであるが、眼前に見える敗兆に對して、無意味な犧牲となるには、源氏を思ふ心が、餘りに強かつた。

彼の態度が、婉曲なために、淸盛は、一向、之を敵とは思はなかつた。『如何なる場合にも、平家に背くことはない』

と信じて居た。けれども頼政は其の内心に於て彼が保元の亂に於ける働きも、平治の亂に於ける忠勤も、何の酬いを得ないのを不平に思つた。久しく大内守護に當つたが、昇殿さへ許されないのを慊らずと思つた、平家の人々は、何の手柄さへなくて、拔群の立身をしたものが多いに關らず、頼政のみは、年と共に、不遇の中に埋もれゆかうとするのである。彼は、終に堪へ難くなつて、無限の孤愁を歌に托した。

「人知れず大内山の山守は
　木隱れてのみ月を見るかな」

彼は此の一首によつて、始めて昇殿を許されたのである。

けれども彼は、せめて三位まで昇進したいと望んだ。

「上るべき便なき身は木の下に
　しゐを拾ひて世を渡るかな」

之によつて、老境に入つた彼は三位に昇進した。聰明な彼は、之れ以上に立身することを望まなかつた。之を以て彼が進み得べき位階の頂點なりとして、あきらめた。けれども平家の跋扈する有樣は、何時も彼をして不平の激情に驅らしめた。四分五裂して、後方さへ確かでない源氏の衰微は、彼をして竊に暗涙に咽ばしめた。老ひたる彼は、終に平家を倒すことが出來ずに、地下の人になりゆかねばならぬかと思ふと深い哀愁に沈まざるを得なかつた。それを

露光量違いの為重複撮影

彼は、強ひて歌にまぎらして居た。」

B君、

けれども頼政が、勢に驅られて、蹶起せねばならぬ切迫した事情が生じた。それは、平家の暴慢が、溫和な頼政に堪へ難き屈辱を與へたからである。聰明な彼は、今まで堪へ難き多くの場合を忍んだ。其の隱忍も彼の愛子仲綱が、清盛の子宗盛から消え難い極度の恥辱を受くるに及んで、我慢しきれなくなつた。宗盛は、仲綱の愛馬を切に所望し乍ら、之を手に入れるに及んで、馬の背に仲綱の二字を燒

露光量違いの為重複撮影

彼は、強ひて歌にまぎらして居た。

B君、

けれども頼政が、勢に驅られて、蹶起せねばならぬ切迫した事情が生じた。それは、平家の暴慢が、溫和な頼政に堪へ難き屈辱を與へたからである。聰明な彼は、今まで堪へ難き多くの場合を忍んだ。其の隱忍も彼の愛子仲綱が、清盛の子宗盛から消え難い極度の恥辱を受くるに及んで、我慢しきれなくなつた。宗盛は、仲綱の愛馬を切に所望し乍ら、之を手に入れるに及んで、馬の背に仲綱の二字を燒

印して、馬を呼ぶ毎に『仲綱よ』と云つたのである。血氣の仲綱は、それを聞いて、烈しい憤怒の情を抱いて、直ぐ之を其の老いたる父に告げた。之を聞いた頼政も、假令、機會は熟せずとも、平氏の專橫に反抗せんとする空氣が次第に動搖するのを見て、急に起ち上つて清盛を倒さうと決心した。

聰明な老巧な頼政には、略ぼ其の結果が、想像し得られたであらう。けれども彼は、必至の勢に驅られた。成敗は、必ずしも彼の問ふところでなかつた。

B君、

源氏が、平家を壓すべき時機は、未だ充分に熟しなかつた。それに頼政は、餘りに平家に對して微力であつた。彼の策略は、可なりに巧妙であつたけれども、備へが充實して居ないために、脆くも悲慘な敗北に終らねばならなかつた。彼が奉じた以仁王も、戰亂のため流矢に中つて薨ぜられた。頼政も亦、一族郎黨と共に、宇治に決戰して斃れた。彼が苦戰の末に、多くの敵を惱まして、所々に傷を負うて、平等院の釣殿に退いたとき、猶は充分の勇氣を湛えて居た。彼は、此の世と別れるに臨んで靜かに其の所懷を咏んだ。

「埋木の花咲くこともなかりしに
　身のなるはてぞあはれなりける

彼は三百遍ばかり、念佛を唱へつゝ、自分の太刀の先を腹に當てゝ倒れ懸り、一身を貫いて呼吸を引取つた。先驅者の運命は、常に此に歸するのである。

けれども彼が以仁王の令旨を奉じて、平家に反抗して、悲壯な最後を遂げたことは、やがて諸國に散在する源氏をして、蹶起せしむる動力となつた。平家が源氏を壓せんとすればするほど、源氏の反撥力は、漸く強くなつた。先驅者頼政の死は、先づ頼朝の心を刺戟した。木曾義仲も、平家に向つて戰ひを挑むに至つた。其の結果、白旗は再び天

下に號令することになつたのである。此の意味からすれば、賴政の努力は、徒勞ではなかつた。彼が先驅者としての悲壯な最後は、永久に滅すべからざる感激を殘した。彼は、源氏の中に於て、最も早く醒め乍ら、勢に驅られて多くの苦痛を忍んだが、終に時潮の傾向を直覺して、先驅者の使命を全うしたのである。私は、宇治の旅舍に於ける感想の一片として此に君に賴政の事を書き送るのである。私は、これから宇治の名所を訪れやうと思つて居る。雨はポツリ〳〵と降り出した。此の雨の宇治の懷しい味は、歸京してから君に話したい。失敬

自己中心主義者の生涯

自己中心主義者の生涯

（源　頼朝）

T君、

御手紙難有う。君と魚河岸の屋臺で壽司を喰べて別れてから、恰度、一週間を經過した。今朝、君が春の淡雪を見て、感想を托して寄越された歌を誦すると、如何にも自然にのび〳〵した情緒が表現せられて居る。君は、今、頼朝について、新しい解釋を下した一篇の劇詩を作りつゝある相だが、私も亦、頼朝の事について、斷片的の考へを以

て居る。今夜はそれを君に書いて送りたい。

T君、

私は、今迄、頼朝の生涯について、多くの感興を持たなかつた。君も知つて居る通り、近來、私は、頻りに哲學に親しむやうになつて、幾分か内部生活に理性の分子が加味せられたが、それでも時々醱酵する情熱のために、詩人的情熱に魅せらるゝことが多い。頼朝は、如何見ても意志の人で、極めて冷めたい。頼朝の事を考へると、時々、情熱の炎を冷却せられるやうに思はれてならない。それで

私は、頼朝の生涯に於て、深い興味を持たなかつたのである。けれども頼朝の生涯を内面的に見ると、其の複雑な點が、何となく、私に一種の興味を感ぜしめるやうになつた。それは、彼が激しい自己中心主義の權化で、此の事から、彼の身邊に、いろ／＼の問題が湧いて居るからである。

頼朝は、極端な自己中心主義者であつた。彼の意志、彼の權力を擴充させることが、生涯の慾望であつた。之がために、自己の迷惑にならない程度で、あらゆる犠牲を拂ふことを、何とも思はなかつた。頼朝が呼吸した時代には、自己中心主義の人物は、極めて少かつた。而して其の度合

も、頼朝のやうに深いものはなかつた。彼の一生は、斯くした主義の實現に努力した記録である。

T君、

私は、近代思潮に蕩漾せられつゝ多くの青年が、自己中心主義となるのを怪しまない。けれども鎌倉時代を生み出した頼朝が、早くも自己中心主義者の第一人たることを異とせざるを得ない。けれども頼朝の父義朝は、保元平治の時代に於けるEgoistの第一人であつた。義朝の胸は、唯功名にのみ憧憬れて、其の父と子と弟とを犠牲にすること

を甘んじた。斯うした殘忍な血は、自然に頼朝の脈管に傳はつて居たのである。殊に頼朝の前半生は、追窮の苦みに惱まされて、一日も安心することが出來ないことが多かつた。不安と窮乏と艱苦とは、容赦なく彼を苦めた。此の苦い經驗が、彼をして、自然に自己中心主義に走らしめたものと思はれる。

彼の少年時代は、總て悲慘痛苦の色を帶びて居る。平治の亂に、父義朝が、平家のために打破られて、逃げゆく時、頼朝は、十三歳の一少年であつた。彼は、初陣に敵兵二人を斃して、其の勇氣を認められた。義朝が危急から逃れゆく後に辛くも續いて、馬上に眠り乍ら走つた。夜に入つて、

露光量違いの為重複撮影

近江森山驛を過ぎようとすると、村民は、彼の擧動を怪しんで、之を包圍した。年少の彼は、落付きはらつて、其の中の二人を斃して、尙ほも父の後を追ふ中に又遲れて了つた。

　賴朝は鎌田政家に父の行衞を敎へられて、又追隨したが、途中、大雪に逢つて、馬が進まなくなつた。義朝以下、何れも徒歩する中に、賴朝は終に父の影を見失つた。爾來、彼は、佛寺の中に潜み、或は他人の家に寄食して、漂泊の旅を續けつゝ、漸く東國に赴いた。平家は、何處までも彼を追窮して、到頭之を捕へて、六波羅に引出した。當時の賴朝は、殘虐な運命の翻弄に苦められて深い孤愁の感じが、

露光量違いの為重複撮影

近江森山驛を過ぎようとすると、村民は、彼の擧動を怪しんで、之を包圍した。年少の彼は、落付きはらつて、其の中の二人を斃して、尚ほも父の後を追ふ中に又遲れて了つた。

賴朝は鎌田政家に父の行衞を敎へられて、又追隨したが、途中、大雪に逢つて、馬が進まなくなつた。義朝以下、何れも徒歩する中に、賴朝は終に父の影を見失つた。爾來、彼は、佛寺の中に潜み、或は他人の家に寄食して、漂泊の旅を續けつゝ、漸く東國に赴いた。平家は、何處までも彼を追窮して、到頭之を捕へて、六波羅に引出した。當時の賴朝は、殘虐な運命の翻弄に苦められて深い孤愁の感じが、

心の奥に浸み入つたであらう。彼が捕へられた時、彼は最早生命なきものと覺悟した。けれども運命は、尚ほ彼を見捨てなかつた。清盛の繼母池禪尼や、平宗清の同情によつて、伊豆蛭島に流竄せられたのである。斯うした境遇は、彼をして自然に冷やかな理性を發達せしめた。

「T君、

伊豆に於ける頼朝は、伊東祐親及び北條時政の嚴重な監視の下に不安な日を送つて居た。此の窮苦の中に、彼は次第に成長して立派な若者となつた。彼は、絶えず源氏再興

の一念に燃えて居たが、容易に之を外に現はさなかつた。唯、靜かに其の時機を待つた。暖かい伊豆の空氣は、青春の血に滿ちた彼をして、功名よりも先づ戀の詩人たらしめた。彼は、祐親の愛孃と深い契りを結んだ。此の事を嗅ぎ付けた祐親は、烈火のやうに怒つて、二人の間を分離させて、娘を江間小二郎に嫁せしめ、其の娘が生んだ子を、無殘にも海の底に沈めた。此の悲劇は、若き賴朝の心に癒え難い傷を與へた。假令、其の戀は、一時的のものであつても、平家への誠を表はすため、其の孫を犧牲にして悔いなかつた祐親の行爲は、賴朝の心に冷たい感じを與へた。」

「祐親は、平家の未來のために賴朝の存在を呪つた。彼は

賴朝の生命を奪つて、平家の深憂を根柢から斷たうとしたのを、祐親の子祐清から、賴朝に告げたので、賴朝は驚いて時政の許に逃れた。彼は此でも亦時政の愛娘政子と戀に落ちた。時政は、之を知つて知らない顏をし乍ら、政子を平兼隆に嫁せしめた。けれども政子は、何處迄も、賴朝に誠の戀を寄せて居るので、間もなく逃げかへつた。此の頃の賴朝は、全然、意志の權化ではなかつた。何處かに情緒の曖昧が、ほの見えて居た。けれども彼が、ロマンチックの夢に醉ふ時代は、長く續かなかつた。時代の潮流は、彼をして、一種の Adventure を試ましむべく、彼を戀の詩境から醒ました。」

T君、

頼朝が、以仁王の令旨を奉じて、旗を揚げるまでは、未だ彼の胸に確乎した自信はなかつた。天下の政權を、彼の掌中に握らうとする野心はあつても、其の實現は全く不可能とあきらめて居た。彼は、三善康信が、京都から彼に報じた書信によつて、平家が、根柢から源氏の根を絶たうとする陰謀のあることを知つた。彼は、自然に斷崖迄追ひつめられたやうな境地に置かれた。若し手を束ねて居ると、死の谷に葬られるより他はない。此の時、頼朝は、大なる

危險を冒して、反抗せねばならぬ運命を荷はせられたのである。

頼朝は又俠僧文覺から、強い刺戟を受けた。文覺は、平家の命運が次第に隱微の間に傾きゆくのを、それと察した。彼は頼朝の非凡な性格を見ぬいて、頻りに平家に反抗することを勸めた。傳說によると、『文覺は、頼朝を刺戟するために懷中から義朝の髑髏を出して、頼朝の發憤を促した』とある。而して文覺は、頼朝のために院宣を賜つて、平家を討つことに決意せしめた。容易に自重して動かなかつた頼朝も、此の間際に死生を賭して、平家反抗の叫びを揚ぐるに至つた。

けれども最初、頼朝の運は、未だ開けなかつた。石橋山の敗戰は、彼をして、將に其の生命を失はしめようとした。此の危機に臨んで、彼は敵の目を晦して、再び起つことが出來た。其の後に於ける彼は、多少、漂泊の苦しみを積んだけれども、勃興の機運は次第に熟して源氏の人々は、爭ふて彼の麾下に馳せ集つた。彼の Adventure は、徒勞ではなかつた。彼は機運の潮に乘つて、安房、上總、下總を風靡すると共に、武藏をも平定して、相摸に歸り、千葉常胤の建策によつて、幕府を鎌倉に開いたのである。彼の自己中心主義は、實際界と接觸する毎に、其の度を强めて至つた。源氏の嫡宗としての誇りは、彼が試みた冒險の一成功と共

に、彼をして、自己を中心として、一切を批判し、處置するやうにならしめた。彼の意志に反するものは、直ぐに之を取除くことに躊躇しなくなつた。それと共に實際界に於ける彼の活動は、彼をして其の熱情を冷却せしめ、鐵の如き意志に鞭つ傾向を帶びさせるやうになつた。

T君、

彼の强き冷靜な性格は、其の自己中心主義を充分に擴大させた。彼は鎌倉に幕府を開いて以來、富士河に於て、平家の大軍を破り、其の根據は、漸く固くなつた。けれども

彼は尙ほ平氏の勢力を過大に見積つて、『之と併行して、朝廷に仕ふることさへ出來たら、滿足だ』と云ふやうな感じを持つて居た。此の感じは、一時的で、自己中心主義の彼には永續すべきものでなかつた。彼は木曾義仲の飛躍を見て、自己が伸びゆかんとする範圍を侵すものと疑つて、先づ義仲に戰ひを挑んだ。義仲が其の愛兒を質とした犧牲的精神は、賴朝の心を柔げて、爭ひを中止せられたが、間もなく義仲が京都に入るに及んで、到頭、爭ひの火蓋を切つた。畢竟、義仲が中央に於て、機先を制して、要路に立つた事が、甚しく彼の自己中心主義を毀損した爲めに、同族の間柄であり乍ら、最後の打擊を與へて義仲を犧牲とし

た。

斯うした傾向は、賴朝が年を重ねるに從つて、次第に激しくなつた。殘忍な義朝の血を稟けた彼は、其の自己中心主義を極端まで、押しひろめねば止まなかつた。彼は、義仲の最後に向つて、一滴の淚さへ注がなかつた。義仲の子義高を殺す時も、それが賴朝の愛娘が戀着して居る事を、知つて居乍ら、惜氣もなく之を斬つて捨てた。彼が青春の血に燃ゆる時、伊東祐親によつて行はれた殘忍な振舞が、自然、彼の心に痛みを與へて居るに關らず、彼は同樣の殘忍な行爲を執つた。彼は、何處迄も、自己中心主義の信徒であつた。

T君、

彼が、天下の政權を握るやうに至つたのは、彼れ一人の努力ではなかつた。其の成功の一半は、義經、範頼等に負ふところが多いのである。けれども彼は、自己中心主義から觀察して、義經、範頼の存在を咀つた。彼の子孫の繼續は、之等肉身の人々によつて固められることに氣付かずして、義經の軍事上に於ける非凡な才能を恐れて、梶原景時の些細な讒言を前提に、義經を斃したのである。彼は、義經の他に範頼をも倒した、彼は又或口實の下に、安田義定、

平忠常、源義綱、源行家、武田忠頼等を倒した。獨立して大事を爲すべき實力ある人々は、之がために、多く葬り去られた。頼朝は、之によつて『其の子孫の安全を保つことが出來る。』と信じたのである。けれどもそれは、大なる誤りであつた。此の殺伐狹隘な方法は、却て源氏の基礎を動搖させる前提にすぎなかつた。

「義經、範頼等を犧牲として安心した後の彼は、其の心に或陰鬱な影を宿さなかつたであらうか。少くとも彼の心に痛みを受けなかつたらうか。自己中心主義の彼は、時として其の弟達を想ひ出したことはあつても、左程、氣にかけなかつたであらう。寧ろ彼の妨げとなるべきものを除い

たと云ふ快感を抱いたかも知れない。けれども之を靜觀する物の眼から見ると、それは淋しい安心にすぎなかつた。斯うして得た彼の基礎には、早くも暗愁の影が附き纏うて居ることを認めぬわけにゆかない。嗚呼、勝利の悲哀を知らざる極端な自己中心主義者よ。」

T君、

私は、必ずしも自己中心主義を咀ふのではない。近代人は、悉く自己中心主義者である。彼等が自己を物心二面に擴充せんとする慾望は、無限に増大して、殆ど其の抑

制に苦みつゝある。知識ある階級は、絶對に『神』の力を認めず、カテゴリカル、インペラチブをも認めず、自己の確信を以て、其の内生命を滿たすべき生活を創造せんとしつゝある。斯うした自己中心主義は、極端な無意味な頼朝の自己中心主義とは、其の趣を異にして居るのである。

頼朝の自己中心主義から來る應報は、彼の一生の中には、其の形を現はさなかつた。けれども見えざる中に、應報の影は動いて居た。彼の愛子頼家の悲慘な最後、其の後を繼いだ實朝の災厄は、必竟、頼朝が極端に自己中心主義を押しひろめたところに孕まれたのである。

頼朝は、勝利の子として、強い意志の力を表現した。け

れども彼の勝利は、彼の最後と共に暗愁隱鬱の空氣を源氏の歷史に殘すべき悲哀の勝利であつた。彼が此の點に覺醒の眼を開かなかつたのは、彼が餘りに內部生命について考へなかつた結果である。それにしても、伊豆蛭島の一孤島から起つて、底力ある幕府を建設した彼は、意志の英雄として、極端な自己中心主義者の代表として、私等近代人の生活に向つて、或暗示を與へるやうにも思はれる。私は、斯うした見方から、賴朝を記憶したい。

然し吾友よ、君が劇詩に現はれた賴朝は、如何な色彩を帶びて現はれるであらう。私は切に其の生誕を待ち設けて居る。失敬。

赤き情熱の Romance

赤き情熱のロマンス

（源　義經）

『自分はモスクワで死ねば宜かつた』

ナポレオンが、空から意地惡さうに下界を覗く青白い配所の月を仰いでの苦しい述懐は之れであつた。彼は行けるところ迄は行かねば止まない不休の精神に驅られ、思ひもかけぬ悲痛な最後を遂げねばならなかつた。けれども彼の生涯を一篇のロマンスとして見ると、彼が絶海の一孤島で悶死した事が、其の歴史に限りない餘韻を殘して居る。

「之と同様な感じを與へるのは、情熱の人義經の生涯である。若し義經に眞實の告白を求めたら、彼は凱旋の途中に呼吸を引取るやうな靜寂の永別を望んだかも知れない。けれども運命は、彼をして雪に埋もれた吉野の山中に隠れしめ、更に奥州に逃亡せしめて、荒寥を極めた自然の背景に圍繞せられ乍ら、淋しい終焉を告げしめた。此の悽慘な末路は、彼の歴史に限りなき情趣を漂はして居る。

「情熱の人義經の生涯は、暗い淋しい道を辿つた源氏の人人の中にあつて、錦繪のやうな花やかさと、晩春の哀別のやうな詩情とを喚起す。其の前半の歴史はパッと春の光を浴びた櫻花のやうであるが、後半の歴史は、秋風に舞ひゆく落葉のやうな趣がある。此の對照は、運命の糸に操れたにもよるが、其の力強い原因は、彼の燃ゆるやうな情熱から來て居る。私は、少年時代に繪本で見た彼と皆鶴姫との戀を忘れることが出來ない。彼は、其の兄賴朝の冷靜な性格とは、全く別樣のやうな性格を具へて居た。秋の水のやうに澄み渡つた賴朝の胸に對して、義經の胸は、憤火のやうに炎々と燃えて居た。斯うした熾烈な情熱は、彼をして、其の生涯をロマンチックの色彩に塗抹せしめた。

傳説に依ると、彼の少年時代が既に一篇の劇詩であつた。

其の漸く物心づいた頃は、平家全盛の世で、彼は薄暗い日蔭に咲いた無名の花のやうに、幽な生存をつゞけて居るに過ぎなかつた。彼は、父義朝の俤さへハッキリ記憶しなかつた。母の常磐は、清盛のために汚された末、一條大倉卿長成に嫁した。義經は、此の長成の許に七歳の少年となつた。

當時、平家は、細心の注意を以て義朝の遺兒を追窮した。常磐が生んだ今若、乙若も平家の嫌疑を避けるため出家の身となつた。牛若も——義經の幼名——亦、鋭い平家の視線から遠ざかるために、鞍馬寺の僧覺日の許に預けられて、其處に淋しい生活を送る事になつた。

最初、義經は、學問に精通したが、十一歳の頃、漸く其の名望ある家系を知つて、源氏の一門が、四方に落葉の如く飄零することを嘆かずに居られなかつた、而して平家の一門が、世の中を我物のやうに濶歩して、歡樂の巷にさまよふのを憤つた。何とかして、衰微に陷つた源氏を再興して、白旗が赤旗に代る時代が來るやうに眞心から祈つた。其の後義經は佛學よりも、武藝に全心を傾けて、人知れず筋骨を鍛えた。

鞍馬の奥に、僧正谷と呼ぶ所があつた。晝さへ冷たい寂寥の空氣が漂うて、夜になると、暗中に魍魎が跳梁して、誰一人之を恐れぬものはないと傳へられた。其處には、靈

驗著しい貴船明神が、鎭座せられてあつた。けれども此に詣でる信仰者は、次第に稀れになつた。彼の傳説にある宇治の橋姫も、此に詣でたのである。

義經は、日毎に夜に入ると、貴船明神の祠前に跪いて、平家を咀ひ、源氏の再興を祈つた。其の祈禱と共に夜は更けた。黑い幕が四邊を包んで、魍魎が其の姿を現す恐ろしさも義經を動かすことが出來なかつた。彼は、曉近くまで僧正谷に居るのが常であつた。斯うした堅い決心によつて、彼の武藝も、著しい進境を示した。けれども此の秘密は、何時か覺日に嗅ぎ付けられたので僧正谷に行くのを絕對に禁止ぜられるやうになつた。

覺日は、義經が、佛の道を手頼らずに、武藝に心を寄せて、日毎に修道の荒みゆくを嘆いた。輝くやうに美しい義經の顏を見ると、憐れを覺えるが、今の中に、其の滴るやうな黑髮を斷つて、出家せしめないと、道心は頓に廢滅して了ふであらうと憂苦した。而して義經に向つて、切に出家得道の人となる事を勸めた。けれども義經は、聽かなかつた。若し强ゐて之を迫つたら、覺日を斬り捨てんばかりの氣勢を示した。義經は出家を强ゐられずに濟んだ。

義經が源氏の再興に熱中する間に、早くも十六歲の若者

となつた。彼は、豫て奥州に於ける藤原秀衡の勢力を知つて、之に手頼らうと思つた。けれども親しみのない遼遠な旅の道を辿ることは、孤獨者にとつて、少からぬ重荷であつた。せめて漂泊の途に上る道伴れが一人だけでも欲しいと思つた。

當時、奥州の方へ度々赴く金商人に吉次と云ふものがあつた。彼は、京に入る毎に、鞍馬寺に參詣する中に、何時か義經と親しくなつた。義經は一日も早く憧憬の熱情を寄せつゝある奥州に行かうと焦慮つて、吉次に其の切なる希望を話した。けれども吉次は、義經を誘ひ出した爲めに、覺日の怒りに觸れはしまいかと恐れた。義經は、其の杞憂なき事を告げ、奥州の道伴れとなることを望んで止まなかつた。吉次は、終に其の熱心に動かされて、義經を伴ふことゝなつた。荒寥たる奥州は、義經にとつて、當時無限の希望であつた、歡喜であつた。

義經が奥州へ行くとき、源頼政の從子深栖頼重も之に從ふた。頼重は、鞍馬寺で、義經に逢つて、互に其の心の默會を得たのである。此等の若き二人の旅客は、快活な吉次の話に興じ乍ら、其の歩みを速めた。京洛の優しい風色に永き袂別を告げつゝ、——

義經が奥州に行く途中には、種々の變化ある出來事に逢つて居る。傳說によると、彼が元服して、源九郎義經と稱した記憶の深い土地——近江鏡宿——では、鬼のやうな强賊の來襲を防いで、其の四人を斃して、殘餘のものに手傷を負はせた勇ましいロマンスが綴られてある。それから上野荒蒔の里で、彼の最も忠實な勇士伊勢三郎義盛を臣下に從へた奇緣に富んだ事實がある。

義經が、長い旅路を重ねて奥州に着いた時、秀衡の喜びは、胸に溢れた。源氏の公達として、其の颯爽たる美しい風貌は、繪のやうに輝いて見えた。秀衡は、滿腔の誠を捧げて、義經を厚遇した。金商人吉次も、義經を伴ふた爲め

に、多くの財寶を秀衡から與へられた。此迄來て、京洛の地を顧ると、全く地球の外にあるやうだ。最早、平家の時めく風は少しも吹いて來ないのである。義經は、平泉の館で、靜かに其の勢力を養ひ、源氏再興の機會が熟するのを待ちわびて居た。

情熱の人義經は、始終、其の烈しい感情によつて、直線的に動く傾向を持つて居た。治承四年、義經の兄賴朝が、平家顚覆の叫びを揚げたとき、義經は急いで賴朝の許に馳け付けて力を添へようとした。けれども老實な秀衡は、平

家全盛の時に、勝利を得ることは、非常にむづかしいので、暫く其の成行を見て居るように注意した。秀衡の暖い心は、義經にもわかつて居る。それでも一度、烈しい情熱に驅られると、ヂッと辛抱し切れないのが、義經の性質である。秀衡の暖い心持は、義經に能くわかつて居るのであるが、彼は思ひ立つた點に一直線に突進しようとするのを制することが出來なかつた。彼は、秀衡に、それと知らさずに、平泉の館から忍び出た。秀衡は、義經の意嚮をそれと知つて、最早、强ゐて止めはしなかつた。而して佐藤繼信、忠信の二勇士を、義經に從はしめて、守護に當らせた。

平家の人々が、富士川に於て、思はぬ敗北の屈辱を受けてから間もなく、勇氣に溢れた義經の姿は、黄瀬川に見出された。義經が白旗を風に靡かせて、數十騎の勇士を從へた勢は、殊に鮮かであつた。彼は鎌倉殿の陣屋を尋ねた。土肥實平、岡崎義實等が、其の取次に出たが、未だ見馴れない容貌なので、義經とは知らなかつた。けれども賴朝は早くも義經と察して、之を引見すると、昔の牛若は、今、花やかな若大將として、賴朝の眼に映つた。

長い間、東西に隔て居た兄弟が、計らずも、軍旅の中に始めて其の顔を合せた時の喜びは、暗黒の谷に於て復活の曙光に接したやうであつたらう。冷やかな賴朝も、此の時ばかりは、友情が潮のやうに湧き出づるのを覺えたであら

露光量違いの為重複撮影

う。情熱の人義經は、深き感激に打たれて、知らず〳〵熱い涙が其の頬を沾したであらう。此の二人の遭逢は、やがて源氏の勢力を、强大ならしむる主因となつた。

義經が活動の舞臺は、眼前に開かれた。戰爭に於て、天才とも云ふべき彼の働きは、不可思議な魔力を持つやうであつた。彼が赤地の錦の直垂に、紫下濃の鎧を着て、鍬形打つた甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、二十四指した截生の矢を負ひ、滋籐の弓を手に持つた姿は、平家の最も怖るゝところとなつた。一の谷の戰ひに、搦手に向つた彼

露光量違いの為重複撮影

う。情熱の人義經は、深き感激に打たれて、知らず〳〵熱い涙が其の頰を沾したであらう。此の二人の遭逢は、やがて源氏の勢力を、强大ならしむる主因となつた。

義經が活動の舞臺は、眼前に開かれた。戰爭に於て、天才とも云ふべき彼の働きは、不可思議な魔力を持つやうであつた。彼が赤地の錦の直垂に、紫下濃の鎧を着て、鍬形打つた甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、二十四指した截生の矢を負ひ、滋籐の弓を手に持つた姿は、平家の最も怖るゝところとなつた。一の谷の戰ひに、搦手に向つた彼

の神速な行動は、平家の人達を驚かした。彼が特に拔擢した七十餘騎の勇者を從へて、積雪を蹴破りつゝ、一の谷の後方、鵯越の險を眞逆樣に乘り落した突進の早さ、敵は一たまりもなく壞滅した。

　義經は、如何なる場合にも、自己の全生命を捨てゝかゝつた。彼が敵に對する謀略が定まると、一瞬も躊躇せずに、先づ自身が眞先に陣頭に起つて、部下を勵ました。それは、恰度、優れた、藝術家が、一度、湧くやうな感興に打たれて、思想の奔逸を止めることが出來ずに夜を徹して、一氣にペンを馳せるやうであつた。若し此の際、藝術家に向つて、其のペンを中止せよと云はれたら、必度、激昂するや

うに、義經も亦、彼が戰略を實行するとき、其の眞先に進もうとする決意を遮るものがあると、彼は、それを顧みようともしなかつた。屋島の戰ひに、義經が先陣に出ようとしたのを、梶原景時は、輕擧なりとして反對した。けれども義經は此の抗議に耳を傾けなかつた。彼は又攝津渡邊の濱から、暴風怒濤を物ともせず、一氣に阿波の椿浦に着いて、途中、到る處、其の勢威の下に敵を壓して、瞬く間に屋島の根據を覆へして了つた。それが平家には、魔力の如く思はれた。此の神速な戰術は、壇の浦の大戰に於ても亦、平家の人々を惱まして、源氏の大捷に歸せしめた。義經の恐ろしい戰術は平家の地盤を粉微塵に碎いて了つた。

義經の戰術は、彼をして、平家の破壞者として、其の名を高からしめた。けれども其の勝利の榮光に、彼の身邊を照されるとき、蹉跌の運命は、早くも其の萌芽をほのめかして居た。彼の敵は、彼の傍に眼を睜つて居た。其の蛇の如く敏慧な眼は、義經を滅亡の谷に埋めなければ止まなかつた。彼の敵は、當時、頼朝に愛せられた梶原景時であつた。

義經と景時は、全く其の性情を異にして居た。義經は、感情の支配によつて、直線的に動いたが、景時は、感情よ

りも理性によつて、螺旋的に動いた。理性から出立した景時と、感情から出立した義經とは、火と水のやうであつた。義經が攝津渡邊の濱から船を出すとき、景時は、東軍が水戰に馴れないために、『逆櫓を作つては如何で御座りませう』と義經に勸めた。景時は之によつて、船の進退を自由にしようと考へたのである。けれども義經は、退くと云ふことを咀つた。彼は、何處までも快く突進することを喜んで景時の獻策を用ゐなかつた。梶原は、之を不快に思つて、徒に突進するものを野猪の勇氣に譬へた爲めに、到頭、義經と感情の衝突を惹起した。其の時から、梶原は、義經が自分の策を用ゐないのを憤つて、之が報復を計ること

にのみ心を傾けて居たのである。けれども自信力の強い正直な義經は、斯うした恐ろしい罠があることを、少しも考へなかつた。恐るべき讒言は、何時しか景時の手から、早くも頼朝の許に送られたのである。

景時の讒訴が、頼朝の手に入つた時、頼朝は少からず驚いた。冷靜な彼は、兄弟の情愛よりも、規律を重んじた。義經が、景時の言葉を用ゐずに、其の自由な態度によつて、總ての事を決するのを憎んだ。而して彼は、景時の言葉に依つて、勳功の多い義經を勘當することに決して了つた。

義經は、鎌倉にある賴朝の胸中を知らなかつた。彼が平家の根柢を絕つて、宗盛父子を捕へて、鎌倉に歸る途中、其の勳功に對して相當の報酬を得べきことを信じて疑はなかつた。處が此の望みと確信とは、急に破壞せられた。文治元年五月、義經が宗盛父子を伴つて、鎌倉に入らんとするとき、賴朝の命によつて、北條時政等は、酒匂に宗盛父子を受取るべく出立すると共に、小山朝光は、義經に對する使者として『何分の下知を御待ちありたい』と傳へた。

義經は鎌倉に入ることを許されなかつた。正直な義經は、其の意外なる言葉に驚いた。彼には、何の異志もない、兄の位置を奪つて、自分が勢力を獨占しようとするやうな野

心は微塵もない。唯源氏のため、一門再興のためを思つて懸命に戰つたのみである。其の報酬が、冷かな一片の嚴酷な言葉に止められやうとは思はなかつた。凱旋の將軍が孤立した囚虜の如く冷遇せらるゝことは堪へ難き苦痛であつた。情熱に動いた彼は、又情熱のために、彼れ自身を危うする運命に出逢つた。

義經は、兄賴朝に對して、暖かい心を持つて居た。時には情熱の奔逸するまゝに、多少奇矯放恣な態度を以て、部下に臨んだこともあつたが、左程、それを惡いとは思はな

かつた。けれども冷かな頼朝の胸は、氷の如く固結して、容易に融和しない。淋しい思ひを抱いて、腰越の驛に止つて居る義經に向つて何日までも何の沙汰さへしないのである。心に蟠りのない義經は、事態の重大なるを憂苦して、頻りに頼朝の感情を柔げようと努力した。彼は、一片の嘆願書を草して大江廣元の手を通じて、頼朝の許に送つた。其の書中に、義經の眞實な感想が、力強く出て居る。けれども感情に左右されない頼朝にとつては、血を吐くやうな義經の嘆願も無用の反古より輕く見たかも知れない。

義經は、到頭、鎌倉に入ることが出來なかつた。平家の根柢を絕つたのは、彼れ一人の力ではないか。彼の兵略上

の天才に負ふところが少くない。風濤と戰ひ、險峻と戰ひ、劍戟の間に死生を賭して戰つた結果が悲慘な冷遇を受けようとは、夢にも思はなかつたであらう。宗盛父子を囚虜とした凱旋の人が、今は、宗盛父子と左程變らない運命の孤獨者となつた。勝利から憂愁へ、得意から失意へ急轉した激變に向つて、義經の痛恨は抑へるに由なかつた。彼は何とかして、此の運命から逃れようとした。少くとも、頼朝の心を柔げ得ない道理はないやうに思はれてならなかつた。けれども一切は徒勞に歸した。慚憤の炎に燃えつゝ宗盛父子等と歸洛の途についた。腰越驛の淋しさよ。

義經が京都に着く迄に、近江國篠原に於て、宗盛父子の首を刎ねられた。此の行に加はつた重衡も、亦間もなく南都に於て、悲痛な最期を遂げた。不過な義經には、之を他事と思へなかつた、重き憂愁の霧は、彼の胸を鎖した。

義經が、京都の邸宅に蟄居する間に、種々の風聞は、關東に傳はつた。それは、何れも、義經に取つて不利なものばかりであつた。『彼は、頼朝に對して背反を企てつゝある』と噂せられた。頼朝の不興を受けて居た叔父行家に同情を

寄せたのが、却て誤解の原因となつて傳はつた。何れにしても、義經の周圍は、呪ひの聲を以て滿たされた。それから間もなく、義經は、眞夜中に土佐房昌俊の襲ふところとなつた。義經は一氣に之を壞滅せしめたが、最早、何日迄も、柔順な態度を以て、頼朝に向ふことが不可能となつた。彼は、終に頼朝追討の宣旨を朝廷から賜つて、止むを得ず反抗の人となつた。

此の事を知つた頼朝は、義經を倒すために上洛することに決した。彼は、黄瀬川迄、其の陣を進めて、窃に形勢を觀望して居た。呼吸をもつかずに平家を亡滅せしめた義經も、今は殆ど孤立に近い有樣になつた。如何に軍事上の天

才を有するとしても、頼朝の大軍を迎へて、之を破る丈の準備がない。彼は之を避けて、再擧を計るより他はなかつた。彼は、叔父行家と共に西海道の方に落のびる事とした。彼は、僅かに二百騎ばかりを從へて、淋しく都落をせねばならなかつた。彼は覺えず痛恨の齒を喰ひしめた。

關東の軍勢が京に入つた頃、義經は、攝津河尻に落ちのびて居た。其の途中、彼に從ふものは、次第に四散して、極めて少くなつた。運命は、益々彼を弄んだ。大物浦から船を出さうとすると、急に暴風が起つて、其の目的を遂

げ得なかつた。郎從は、又數を減じた。後に殘つたのは、伊豆右衞門尉、堀彌太郎、武藏坊辨慶、義經の愛妾靜御前の數人に過ぎなかつた。零落の味の苦さよ。彼の味方は、彼の身邊に附隨する人のみで、其の他は、何處を向いても、彼の敵であつた。彼を追窮せんとする呪ひの敵であつた。

義經は、殆ど其の進退に窮した。彼は大物浦から轉じて竊に吉野の山奧に隱れた。山は未だ雪が深かつた。靜御前は、如何なに道に行き惱んだであらう。不遇に惱む英雄、愛人を思ふ美姫の風姿。

義經は、靜御前と共に、五日間、吉野の山中を彷徨ふたが、矢張、身心を安んずべき場所がなかつた。彼は、靜の

一身を憐んだ。心から靜を愛した彼は、之と別るゝに忍びなかつた。けれども運命の切迫に對して如何しても之を手ばなさねばならなかつた。彼は之に多くの金銀を與へ、雜色男を附けて、京まで送りかへすことにした。而して義經は、方向を轉じて、多武峰に逃れて、一時、十字坊と呼ぶ惡僧の許に隱れて居た。間もなく、彼は又敵の追窮が激しいために遠津川の幽靜な場處に潜んだ。

けれども義經は寸刻も油斷することが出來なかつた。曾つて平家を惱まして、漂泊の苦みを與へた彼が、今は、却て平家の落武者よりも苦慘な漂泊を重ぬる事になつた。彼は遂に意を決して、若き時の懷しい第二の故鄕――奥州――

に逃れて秀衡の許に其の一身を托することに定めた。彼は周圍に心を配りつゝ、山伏の姿に扮して、其の妻子と殘餘の郞黨とを從へて、伊勢より美濃、美濃より順路、奥州に向つた。春とは云ひ乍ら、未だ餘寒の身に沁む頃であつた。夜毎に重ぬる苦き旅愁は、義經の心の髓に沁み入つたであらう。

奥州は、義經の第二の故鄕である。彼が鞍馬を出て、金商人吉次に伴はれて、秀衡の許に赴いた時は、若々しき希望の春に輝いて居た。彼が賴朝の蹶起を聞いて、佐藤嗣信、

忠信の二人を從へて、平泉の館を後にした時は、源氏再興の一念に燃えて、其の前途には、大きい希望の影を認めて居た。彼は光明に照されて居るやうな水々しい心持で居た。けれども今度は、憂愁に包まれた絶望の旅である。彼が跳躍すべき第二の機會は、到頭、現はれさうに思へない。奥州の壯大な山河は、義經を弔ふやうに、憐むやうに見えたであらう。

義經は、苦しい思ひをして、漸く奥州に入つて、衣川の館に身を落着けた。彼は、絶望の生を保つて、苦い淋しい日を送らねばならなかつた。のみならず、彼が衣川の館に居る事は、何時か鎌倉に傳はつた。頼朝は飽く迄も、義經

を追窮しなければ止まなかつた。鎌倉からは、頻りに『義經の首を刎ねよ』と促して來た。秀衡の子泰衡は、父の死後、屢々促されて、終に變心して義經を襲ふた。

衣川の館は、泰衡の部下數百人に包圍せられた。猛勇な義經も、僅かばかりの郎黨を以て、之を防ぐことが出來なかつた。『吾が運命は之れ迄である』と覺悟して、持佛堂の前に赴き、其の妻子を刺殺して、自分も亦其の後を追ふた。彼は三十一歳の壯齡で、未だ多くの前途を持つて居た。彼は源氏再興の最大なる犠牲者として此の世を去つた。

義經の前半生を知るものは、彼の不遇な後半生を憐まれずには居られないであらう。けれども彼は情熱の天才であつて、平凡なる末路を見せることが出來ない人であつた。其の牛若時代から、非凡な情熱が、彼をして色彩あるロマンスを創造せしめた。平家を追窮する場合にも、魔力のやうな戰術を示して獨創の兵略を發揮した。此の天才的の情熱が平凡な景時の性格と衝突して、彼の悲痛な最後を遂げしめたのである。壯大な奧州の山河を背景としての潔い最後は、此の天才に適應はしいものであつた。

情熱のために活躍した彼が、情熱のために亡びた事は、自然の成行であらう。平凡な景時の如く、見苦しい最後を示すならば、永く生きて居ても、何の光彩もない。私は義經の非凡な情熱に滿ちた生涯に向つて、讃美の叫びを揚げたい。嗚呼情熱の英雄の赤きロマンス!!!

北國の颱風

北國の飈風

（源　義　仲）

ローマが勢に乗じて腐朽したギリシャを倒すと共に、其の領土が、ヨーロッパの全部及びアジアの西部、アフリカの北部にも伸びた時、彼の前に跪づかぬ國はなかつた。其の專權、意氣は世界を壓するばかりであつた。總ての光榮と歡樂とは、ローマに集つたやうに見えた。一人一夕の饗宴に、三千金を擲ち、春の鶯の腦漿を以て、食膳の三盃酸とすることは珍しくなかつた。

「けれども、ローマが全盛の極點に達した時、衰亡の凶兆は、早くも其の市民の髓に喰ひ入つたのである。歡樂の魔酒はローマの人心を靡爛せしめた。何物をも打破らねば措かぬやうな元氣は、何時か衰え初めた結果、ローマ人が常に侮蔑して居た蠻族のために打破られて滅亡のドン底に陷れられた。腐爛した文明の人々は、常に斯うした悲劇に終るのである。」

平家が、源氏に打克つて、一門の光榮、其の頂點に達した時、『我は平家である』と云ふ誇りが、聲高く叫ばれた。

而して四方に流離した源氏は、重い雪に壓せられた若草のやうに、隱約の間に生氣を養つては居たが、其の表面は、殆ど衰微したやうであつた。當時、平家の人達は、『永久に其の歡樂の夢から醒めずに濟む』と信じたであらう。

けれども平家の基礎は、その一族が文明化して元氣を消磨すると共に、倒壞せざるを得なかつた。彼等が戀と詩歌とに生の歡樂を叫ぶ時、木曾義仲は、北國の颶風の如く急激に現はれて、一擧に都から平家を追ひ落した。義仲の武力は、美しい夢に滿ちた平家の生活を破壞したのである。當時の平家はローマの最後と同じ運命に落ちたのである。

源氏の人々の中で、其の性格が、何處となく似て居るのは、義經と義仲とである。戰爭の勇者たる點に於て、人情に厚い點に於て、自己の個性を少しも蔽はない點に於て、盛衰の激しい點に於て、戀の英雄たる點に於て、此の二人は、似よつた歷史を殘して居る。唯、義經は、義仲に比して、其の情熱が激しく、幾分か都會的氣分を含んで、學問の修養も、義仲よりは進んで居た事が、違つて居る點である。

義仲は、素朴な文明化せざる北國の武人の代表者であつた。彼は詩歌の趣を知らなかつた。社交の形式をも知らなかつた。文明化した京都の中心に出ても、生れ乍らの北國人であつた。彼が平家を倒したのは、斯うした性格に伴ふ武力に依つたのであるが、其の衰滅したのも亦、此に原因して居る。唯、苦き運命に咀はれたばかりではない。

彼の生涯は、北國の飃風のやうであつた。其の平家に反抗して、吹き荒んだ時は、一切を破壞せねば止まぬ勢であつた。彼の過ぐるところは、平家を根柢から殲滅し盡くさねば措かなかつた。けれども其の荒れた後は、次第に勢が微弱となつて、到頭、賴朝のために亡ぼされて了つた。其の勃興も急であつたが、其の滅亡も亦急であつた。

義仲が生長したのは、幽邃な木曾山中であつた。文明の風は、此に吹かず、原始的の素朴な氣風が、早くから義仲の魂に浸み込んだ。彼は、天性の勇者であつた。其の風采は、何處となく英雄らしい處があつた。武藝に於ては、早くから、飛び離れた天才を發揮して、周圍の人達を驚嘆させた。彼の非凡な未來は、彼の若き時から豫測する事が出來た。

彼は、全く平家の視線から離れて、自然に伸びゆく若樹のやうに發達した。彼が物心つく頃から、其の血脈の中に、八幡太郎義家を有すると云ふ誇りが、彼をして源氏再興の

情熱を起させた。彼の修養は、主として之がためにしたのである。

彼は、其の少年時代から青年時代にかけて、時々乳母に伴はれて、平家全盛の都に往來した。彼はそれとなく、形勢を觀望して微細なる注意を拂つて居た。彼は、一日も早く平家を倒壞せしむべき機運の來ることを待ち設けた。

機會は來た。伊豆の賴朝は、以仁王の令旨を賜つて、先づ頭角を擡げた。義仲も亦、同じ令旨を賜つたのを機會として、信濃に兵を起した。義仲の飈風のやうな勢は、忽ち其の下に一千餘騎の軍勢を吸收した。根井行親も義仲の味方と爲つた。其の他甲斐の武田も上野の那羽も、下野の

露光量違いの為重複撮影

足利も、先を爭うて、義仲の麾下に馳せ加はつた。
義仲が、長い間、蓄積した勢力は、平家に向つて、一時に發揮せられた。北國の若き獅子のやうな義仲の元氣は、先づ城の長茂を一氣に打破つた。次ぎに砥波山の戰ひには巧に平家を欺いて、暗夜急に敵を襲うて、一萬八千人を倶利加羅谷に陷れた。彼は、驚き狼狽てる敵を追窮して、颷風の如く、東山、北陸の兩方面から京に迫り、延暦寺と力を一つにして、平家を挾攻しようとする勢を示した。
衰運に向つた平家は、義仲の武力に戰慄して、未だ戰

露光量違いの為重複撮影

足利も、先を争うて、義仲の麾下に馳せ加はつた。
義仲が、長い間、蓄積した勢力は、平家に向つて、一時に發揮せられた。北國の若き獅子のやうな義仲の元氣は、先づ城の長茂を一氣に打破つた。次ぎに砥波山の戰ひには巧に平家を欺いて、暗夜急に敵を襲うて、一萬八千人を倶利加羅谷に陥れた。彼は、驚き狼狽てる敵を追窮して、飄風の如く、東山、北陸の兩方面から京に迫り、延暦寺と力を一つにして、平家を挾攻しようとする勢を示した。
衰運に向つた平家は、義仲の武力に戰慄して、未だ戰

を交へない中に、早くも都落ちの悲劇を演じたので、義仲は、何の反抗も受けずに、平和な光景の間に京都に入つた。當時、旭將軍の威名は、源平二氏の間に高くなつて、武人の頭領たるべき位置は、自然に彼に歸するやうに見えた。けれどもそれは、一時の現象に過ぎなかつた。

素朴な文明化せざる北人の氣風は、到底、京都の氣風と融和することが出來なかつた。義仲の部下は、糧食の缺乏に苦しんで、頻りに奪掠を恣にして、優美な京の市民を驚かした。義仲は、之を制止しようとしなかつた。彼の文明化せざる氣風は、政治の中心に起つべき能力に缺けて居た。彼の信用は、宮廷の中に皆無となつた。彼は、君臣の

區別さへ解せずに、唯其の力を恃んで、自由に大膽な行動をした爲めに、其の勢威は一時の根柢なきものに過ぎなかつた。彼の素朴な野蠻に近い氣象は、優雅な都會の空氣と相容れないために、自然に亡滅せねばならなかつた。けれども彼は其の内部生活を一變すべき自覺を持たなかつた。賴朝は此の弱味に附け入つた。

義仲の武力、材幹は、決して賴朝の下に居らなかつた。けれども其の名望と政治家としての技倆は、遙に其の下にあつた。飈風の如く起つた彼も、賴朝の打擊には、長く抵抗する準備に缺けて居た。宇治の戰ひに於て、義仲が、多勢の敵に襲はれて、敗走の悲しみを見たのは之がためであ

つた。彼は亡滅の谷に向つて、眞逆樣に落ちた。

義仲が、勝利の人として時めいたに對して、彼の最後は餘りに淋しかつた。彼が信濃を出る時、其の部下は、五萬餘騎であつた。けれども其の最後の時は、極めて少數になつて了つた。義仲は殆ど敗北の悲しみを知らなかつた。始終、勝利の喜びに馴れて居た。それがために敗北の悲痛は、身に沁むやうであつた。平生、氣にも留めなかつた鎧さへ、急に重い物のやうに彼を壓するのを覺えた。

彼は、生れた儘の野の人ではあるが、人情の暖味を多

量に持つて居た。悲痛な敗北の際にも、幼少の時から共に起臥した今井兼平の事を忘れなかつた。彼は、兼平に向つて始終其の死生を共にする事を口癖のやうに云つて居た。彼は其の約束を最終まで忘れなかつた。彼は、孤立の姿になつて、敵に激しく追窮せられつゝ、度々、其の生命を失はんとしたが、それでも尚ほ堅く約束した兼平と共に此の世を去らうと思つた。斯うした義仲の暖かい人情は、又兼平の胸にも沁み込んで居た。兼平は義仲と同様に主君の最期を見とゞけるために其の行衞を追ふた。而して此の二人は、大津の打出濱で、ピタリと出逢つたのである。此の時の義仲は衷心から喜びの色を見せた。彼は、兼平と力を合

せて、四方から集つて來た三百餘騎の部下と共に、最終の決戰を試みて、烈しく敵を惱ました。けれども敵は、多數である。義仲の手強き反抗も、次第に微弱となりゆく他はなかつた。

兼平は、此の形勢を見て、主君が、名もなき雜兵の手に渡る事を恐れた。彼は、義仲に靜かに自殺するやうに勸めた。而して兼平は、主君が靜かに落ちのびるやうに目に餘る敵と戰つて、度々、之を追ひかへした。其の隙に義仲は、唯一騎、粟津の松原さして逃げのびたのである。

夕暮の色は次第に迫つて、吹きわたる風は、身に沁むばかりに寒く、四方の山は薄暗の中に雪を戴いて、田には氷

が張りつめて居た。義仲は四邊が暗いために、何心なく、深田のある事も知らずに、サッと馬を馳せ入れた爲めに、身動きも出來なくなつた。彼は焦慮つて頻りに馬に鞭を當てたが、容易に動かなかつた、其の中義仲の心身も漸く疲勞の加はるを覺えて、全く進退に窮して了つた。鋭い彼の氣象も、今は運命の征服に對して、強ゐて反抗する力を缺いたやうに見えた、『兼平は如何したであらう』と彼は尙ほ其の事を思ふた。覺えず振仰いで志す方を見る瞬間、石田爲久の放つ矢に、內甲を射られた。ハッと俯向く所を、爲久の部下二人に迫られて、無殘にも北國の獅子は此の世を去つた、間もなく義仲の最期を聞いた兼平は『今はこれまで』と馬上に自刃して潔く其の後を追ふた。劍を含んだやうな夜風は、此の二つの屍を吹きわたつて、隱々と冴えわたる遠寺の鐘は、淋しく響き渡つた。

「義仲の最期の前に優しく彼の心を慰めたのは、兼平の妹巴御前であつた。彼の女は、早くから義仲に愛せられて、常に其の左右に侍した。其の雪白な纖美な皮膚、丈の長い黑髮は、武骨な北國の武人の間にあつて、清艶な色彩が、際立つて見えた。彼の女は、義仲に誠の戀を注ぐと共に、武勇に於ても男子に劣らない力を持つて居た。義仲の敗北

した際にも、彼の女は、其の生命を惜まずに度々、強敵を惱ましたのである。

義仲も、其の最期の近付くと共に巴を憐む心が更に深くなつた。けれども旭將軍とも云はれた彼が『最後の戰ひに婦人を伴つたと云はれては、永き屈辱である』と云つて終に巴に永き暇を與へて、あかぬ訣別をした。武骨な義仲の歴史に斯うした戀の色彩を有するのは、彼が人情に暖かいためであつた。之を冷かな頼朝に比較すると、全く別の世界に住んで居る人のやうである、其處に暖い親みがある。彼は戰場の勇者であると共に又人情の勇者であつた。彼の生は、素朴な太い線で描かれたが、暖い色彩を帶びて輝

いて居る。

死滅しゆく愛の悲しみ

死滅しゆく愛の悲み

（大姫君）

解放せられた近代的女性は、複雜であつて、『人形の家』に居ることを欲しない。鋭い自覺の眼を睜つて、男子を見詰めて居る。けれども昔の女性は、極めて單純であつた。殊に鎌倉時代の女性は、周圍から何等の刺戟を受けない保守の狀態にあつたので、其の步むべき道は、一定の型の中に入れられてあつた。愛の誠と貞操の意氣地とは、彼等の生活そのものであつた。

當時の女性は、愛と貞操とに生きたのである。若し之を失ふときは、死を宣告せられると同樣の苦痛であつた。愛と貞操のある所に彼等の生命が宿つて居た。斯うした空氣の中に呼吸した頼朝の娘大姫君が、愛と貞操のために、熱烈な獻身の生涯を終つたのは、悼ましいことであつた。

大姫君は、高潔な從順な女性である。彼の女は、其の父のやうに冷かなところは、全く無かつた。最初から深閨の中にあつて、荒い世間の風にも當らずに、平安な生活を送つた。彼の女は、總てに對して、女らしい優味を以て居た。

而して一方には、其の母政子のやうに、思ひつめたことは、何處迄も徹底しなければ止まぬ氣象を遺傳せられて居た。源氏の人々の中に於て、彼の女は、白菊のやうな高潔な、女性美を示した。

彼の女が、木曾義仲の長子義高と結婚した時は、『一生此の良人に誠を捧げよう』と娘氣に決心した。義高は、其の父義仲が、頼朝へ二心なきを表示するための人質となつて來たのである。義高には、同じ年輩の海野幸氏が、從者として附添うて居た。けれども義高の淋しい感じは、容易に消散しなかつたのである。大姫君は、衷心から義高に戀の誠を捧げて、絶えず之を慰めることを忘れなかつた。義高

も亦、彼の女の熱烈な愛のために、蘇生したやうな心持になつて、暫く平和を樂むことが出來た。此の二人の間柄は、日を追うに從つて、愛情の濃密を加へゆくばかりであつた。
運命の神は、義高と大姫君との愛情を呪つたのであらう。不意の出來事が、此の二人を分離させることになつた。それは一度、和睦した義仲と頼朝との間が、不和となつたのである。其の爭ひは、義仲を倒した。此の敗北の知らせは、如何に義高を悲痛に沈ましめたであらう。父の苦い運命は、やがて義高をも見舞ふかも知れないのである。大姫君は、

それとは知らずに、夫の憂ひにみちた顔を見て一層、深き愛着を寄せた。
けれども冷かな頼朝は、假令、娘の聟にもせよ、既に敵として倒した義仲の子を生存せしむることを欲しなかつた。それでも流石に大姫君の悲みを思うて、義高を葬るには忍びなかつたのであるが、冷かな理性の動く儘に、義高を刺殺すことに決した。
此の恐ろしい秘密は、大姫君の侍女を通じて、義高の許に報ぜられた。大姫君は、唯、此の秘密を聞いたばかりでも、驚きと悲みとに深く胸を痛めた。せめて義高が、其の事を豫知して、人知れず逃れ出たのを聞いて、稍心を落着

け得たけれども、何となく不安な感じが彼の女に附纏うて、重い鉛が心臓を壓するやうであつた。

辛うじて逃れ出た義高の生命は、賴朝の家人のために奪はれた。此の事は、秘密にされたのである。それと知らぬ大姬君は、唯、義高の身の上に幸福多かれとのみ祈つて居た。今頃は何處に隱れて居らるゝであらうと、其の消息に憧憬れて居たゞけれども其の悲痛な死が、やがて彼の女の耳に入るに及んで、失神せんばかりに驚いた。其の日から彼の女は、涙の大海に涵された人のやうになつて、飮食の總てを廢した。唯、彼の女の眼に殘れる義高の俤を追想して『此の身も、此の儘、呼吸が絶えたらば』と切に祈つ

た。

「今迄、平和な幸福多き日を送つた大姬君の心は、悲みのために全く傷けられて了つた。彼の女は、義高が初めて來た時分の可憐な風姿を思ひ出した。父母から許されて結婚した日の樂しさを再び眼の前に描いて見た。それから二人が、純粹な愛情の中に溶けあつて、歡樂の花蔭に青春の樂みを讃美するやうな多くの日が續いたことを思つた。無邪氣な義高の笑ひ聲や、優しい言葉の端々が、未だ耳の底に聞えるやうで、自分を呼んで居るのではないかとさへ思つ

た。けれども苦い現實にかへると、義高は、既に影も形もない人である。身には、何の罪もないのに、父の敗北に殉じて世を去つたのである。大姫君は、斯う思うて、義高が、晩春の落花の如く、潔く散りゆく俤を偲んだ。」

「彼の女の生命は、熱烈な愛を義高に捧ぐる點にあつた。今は、其の愛を捧ぐる人がない。彼の女は、生き乍ら、地下の人となつたと同樣の淋し味に襲はれた。日を經るまゝに、彼の女の悲みは、深くなつた。その纖細な白き手は、細く青白くなり初めた。紅潮のやうな頰の色は雨に打たれて、次第に醒めゆく紅薔薇の散り際のやうに光澤を失つた。全身の衰へは、彼の女を病床の人とならしめた。彼の女は、

心の底で聲をかぎりに、義高の名を呼んで、絶えず繰りかへした。けれども義高は、二度と歸らぬのである。」

大姫君の衰へは、其の父母をして、限りなき悲痛に陷らしめた。冷嚴な賴朝も、流石に之れのみは、傍で見て居るのさへ、多大の苦痛であつた。殊に其の母政子の悲みは、極度に達した。せめて娘の心を慰めるために義高の生命を奪つた家人を斬らしめた位であつた。

彼の女の父母は、絶えず神佛に祈つて、大姫君が憂鬱病から恢復するやうに願つた。けれども何の甲斐もなかつた。

政子は、彼の女の心を他に一轉ぜしめようとして、藤原高能に再嫁することを勸めた。此の事は、却て大姬君の神經を昂奮せしめて、その悲みを重くさせた。彼の女は、最初から義高と永き未來までの愛を心に盟つた。彼の女の愛は、義高の物である。義高を除いては、之を自由にすることが出來ない。例令、今は義高が居らずとも、夫に盟つた貞操は、最終まで朽ちぬやうにせねばならぬ。斯うした彼の女の信念は、政子が再嫁を勸めたのを拒絕せしめた。『若しかやうのことが實際となつたら、淵河に身を沈めて見せませう』とキッパリ斷つた。之を聞いた彼の女の母は『夢にも左樣なことを思ふものではない』と云つて、頻りに慰めた。

けれども大姬君の悲みを輕くすることが出來なかつた。却て其の悲みを深くするのみであつた。

大姬君は、義高が此の世を去つてから十四年間、一日も彼を忘れなかつた。賴朝が冷かな臨終に先立つ二年前、鬱々として、冷酷な此の世を去つた。長い〲十四年間彼の女は何處迄も、義高に對して、變らざる愛情を注ぎ、婦人の生命として誇る貞操の純潔を固守した。彼の女の半生は悲みの色に滿ちて居た。總ての物象は、彼の女の眼に悲みの色を帶びて映つたであらう。樂しげに歌ふ人々の聲は、

彼の女を弔ふ挽歌のやうに物淋しく彼の女の耳に響いたであらう。現世一切の歡樂は、彼の女に取つて、泥土に等しいものであつたらう。けれども彼の女は、婦人の生命たる愛と操とに殉して、靜かに呼吸を引取るとき、其處に云ひ知れぬ淋しい滿足と安靜とを覺えたであらう。而して未來に於て、義高の靈と結び付いて、永劫不死の愛に蘇生することを念じたであらう。死滅しゆく愛の悲みに沈みたる可憐の女性よ!!!」

詩の光と暗黒

詩の光と暗黒

（源　實　朝）

Weh! steck' ich in dem Kerker noch? Verfluchtes dumpfes Mauerloch!
Wo selbst das liebe Himmelslicht Trüb durch gemalte Scheiben bricht.

嗚呼堪へがたきかな、吾は尚ほ此の牢獄にあるか、此は呪はれたる憂鬱の石壁の穴なり、愛らしき日光も、此へは濁れる色して、窓の硝子畫を透して通ふ。

ファウストが、不安な眼付をして、叫んだ其の苦悶の一節は、之れである。斯うした惱みは、人生の眞相を明かに

せんとするファウストのみの悩みではない。貴公子ハムレットにも、此の悩みはあつた。『誰がこの厭な世に汗を流し、呻吟きながら、此の様な重荷を忍んで居らうぞ。』と云つた。人の悩みは、永劫に絶えない。鎌倉の貴公子實朝も亦重き悩みの人であつた。彼の境遇、事情はファウストや、ハムレットとは全く異つて居たが、其の苦悶の深さは、決して彼等に譲らなかつた。

彼の悲劇は、頼家の後を繼いだ時に、其の芽を吹き出して居た。彼は、冷やかな自己中心主義者頼朝の子である。

「彼の父は戰ひの人であつた。けれども彼は、劍と楯とを執る代りに、文藝の道に深い溶けるやうな親しみを持つた。俗世の功名よりも、優雅な詩歌の殿堂に憧憬れた。其の面影は、父に似て居ても、其の心は父のやうに冷嚴ではなかつた。總ての物象に對して、デリケートな感じを抱いて居た。彼の一脚は、現實を歩み乍ら、其の一脚は、空想界に踏み入つて居た。若し彼が其の豐富な藝術的氣分を以て、俗惡な政治の世界から全く離れて、詩歌にのみ一身を委ねたら、極めて平和な生を享樂し得たであらう。唯、運命は之を許さなかつた。彼は、恐ろしい權力爭奪の重い空氣が充滿して居る世界へ、引つ張り出されて了つた。悲劇は此

に芽を吹き出した。

不自然な頼家の最後！　鋭く殘酷な北條の鐵の手は、未だ生存すべき頼家を幽冥界に導いた。憤りの心を抱いて此の世を去つた頼家の怨みは、永久に盡きなかつたであらう。其の後を繼いだ實朝は、やがて頼家と同一の悲劇に終るべき運命の人であつた。冷かな鋭い北條の鐵の手は、又實朝の一身に伸ばされやうとするのであつた。

實朝が、黄金の冠を戴いた時、早くも彼は咀はれた鬱憂の牢獄に陷つたと同樣の苦悶に囚はれた。彼の位置は高かつたけれども、彼には何の權力もなかつた。自由もなかつた。唯、空名を擁して、北條の傀儡となつて居る他はなかつた。藝術的氣分の多い彼にも、其の父から讓られた青春の鋭い意氣はあつた。彼は、北條の鐵の手を如何に咀つたであらう。而して如何に自由と權力との光を仰がうと焦慮つたであらう。けれどもそれは、如何に焦慮つても、如何にもがいても、北條の鐵の手がある限りは、徒勞であつた。彼は、矢張、憂鬱の牢獄に呻吟の聲を揚げねばならなかつた。

實朝の周圍には、種々の危險があつた。重い心の苦悶にさへ、堪へ難いのに、彼の生命を奪はうとする敵の眼が、

鋭く彼を睨んで居た。頼家の子公曉の眼は、殊に鋭く、實朝を見つめつゝあつた。頼家の死は、實朝の咀ひによつたものと一心に思ひつめて居た。それのみではない。北條時政の後妻となつた牧の方の眼も怪しく光つて、實朝を見つめて居た。牧の方は、其の女婿平賀朝雅に對する盲愛のために、實朝を犧牲として、朝雅の時代が來るやうに祈つた。實朝の祖父に當る時政さへ、牧の方の誘惑によつて、實朝をなきものとしようとした。けれども實朝は牧の方の咀ひから脫れることが出來た。殘つたのは、公曉の物凄い睨みであつた。

實朝は之を知らずに居たのである。

實朝は、其の多感な胸を絶えず波立たせられて居た。若し彼が憂鬱の牢獄に閉ぢこめられてのみ居たら、彼は、日毎に心の衰へを感じたであらう。けれども彼は、此の間に彷徨ひ乍ら、彼の逃避所を見出した。それは、彼が早くから憧憬れて居た藝術の殿堂であつた。此には、何の不安も、危險も見出されなかつた。神の聖愛に醉ふやうな怡樂の泉が、絶えず流れ出て居た。人情も、道義も、蹂躙られて了つた暗黒界を見た實朝は、此の藝術の境地に於て始めて光明を仰ぎ得たのである。

生活と藝術との融合！　此の事は容易に行はれ難い。け

れども實朝の生活は藝術そのものであつた。「彼は鎌倉の人人が殺伐な方面にのみ心を寄せつゝある事を冷かに見て居た。其の代りに四季の推移と共に變りゆく自然の美に向つては、强き熱情を捧げて、其の味を翫賞することを忘れなかつた。暖かい湘南麗明の地は、彼の詩人らしい觀察に逢うて、其の光を増すやうに見えた。實朝は春の自然の喜びを愛し、秋の自然の悲しみをも愛した。若葉の色が濃かになりゆく夏の風趣を愛すると共に、天地が荒寥の一色に彩どられる冬の詩趣をも愛した。彼は又た鎌倉の周圍にある風光を喜び、壯大な海の美を讃嘆することを忘れなかつた。斯うした彼の生活は、其の詩歌の形式を假りて發表せられ

たのである。彼の藝術は、彼の生活であつた。而して彼の生活は、彼の藝術であつた。

藝術家としての實朝は、其の詩的な空想が白い翼を伸べて自由に翺翔しようとする事が度々であつた。傳説によると、彼は、宋人陳和卿の言葉に動かされて、支那に渡航しようと企てた事があつた。陳和卿は、東大寺建立に與つた佛工である。其の學殖、信仰は、人々の崇敬するところとなつて居た。東大寺供養が嘗て行はれた時、實朝の父、賴朝は陳和卿に對面を求めたけれども『貴方は多くの人を滅した罪が重い。』と云つて、終に逢はなかつた。けれども實朝が、將軍となるに及んで、陳和卿は自ら進んで謁見を求

めた。彼は實朝を見て『貴君は前の世に宋朝醫王山の長老、であつて、私は其の弟子であつたのです。』と云つた。それが嘗て見た實朝の夢――或高僧が現はれて來て話した――と少しも違はなかつた。實朝は、此の夢と現實との符合から、陳和卿の言葉を信じて『一度支那に渡つて、醫王山に詣でて見たい。』と云ふ詩人らしい望みを起した。それがために、わざ〳〵非常に大きい唐船を建造せしめたと傳へられて居る。

實朝が、唐船を建造せしめようとする時、北條義時等は、

頻りに之を思ひ止らせようとした。けれども實朝は、それを聞き入れずに、到頭、之を完成させた。それでも鎌倉の海邊が、遠淺な爲めに、此の大船を浮べることが出來ずに終つた。義時は、之を見て、冷かな笑を浮べたであらうが、實朝には苦い失望であつた。

「實朝は空想に驅られて、大船を作つた。自由と權利とを奪はれた憂鬱の中に居るよりは、異國情調の香が高い醫王山に詣でることが、如何に感興が深いであらうと想像して見たのであらう。其處に彼の藝術的氣分が漂うて居る。」

けれども彼の美しい空想も、ともすれば、醜い現實のために破壞せられやうとした。誠忠な畠山重忠も、勇敢な和

田義盛も、北條の鐵の手に打砕かれて、跡方もなくなつて了つた。賴朝の時代から根強く源氏を護つた人々は、斯うして晩秋の木の葉のやうに零落した。實朝は之等の現實に於ける悲劇を見る毎に、何となく不安な感じと、北條の權威を恣にするについての憤りとが、胸にこみあげて來るやうに思つた。實朝自身の運命さへ、甚しく危殆になりつゝあることを自覺した。「彼が破格を以て、頻りに其の官位の進むことを望んだのも、之がためであつた。此の事について、大江廣元が、實朝を諫めた時、實朝は明かに彼の胸中を語つた『源氏の正統も、この實朝で終りであらうと考へる。せめて私が高位に上つて、家の名を揚げたい

ばかりに昇進するのぢや。』と云ふ言葉の裡には、限りなき淋しい味が籠つて居た。彼は、やがて北條の鐵の手によつて、自己の地位を占らるゝ事を覺悟したのであらう。」

實朝が憂愁と憤りとに苦悶せる時、公曉の眼は、一層鋭く實朝を睨んで居た。公曉は、次第に成長して、鶴岡別當になつた。彼は絶えず復讐の機會を待つて居た。彼は實朝と義時とを倒して、父の怨みを晴さうと焦慮つた。けれども實朝は之に對して何の用意もしなかつた。唯不平と憤りとの中にあつて、藝術の殿堂にのみ憧憬れて居た。彼は、

自ら藝術家を以て誇つては居なかつた。唯、其の遣る瀬ない苦悶の時に、彼の誠實な感想を詩歌に托して、心の晴れやかさと怡悦とを覺えた。けれども彼の誠實な熱情は、彼の歌に溢れて之を誦する人々の胸にも泌み入つた。

彼は、根底から弱い人ではなかつた。唯、彼をして、藝術の殿堂に逃避せしめたのは、彼が藝術的氣分に豐かなのと、時代の切迫した勢とによつたのである。彼には、戰はんとする氣が絶無ではなかつた。自己の自由を壓するものを排除しようとする熱意さへ存在して居るやうであつた。けれども唯彼には、それ丈の力がなかつたのである。力の缺乏！此の事が、彼をして消極方面にのみ傾かしめた。

けれども之がために、彼の詩歌は、向上の一路を開いて、彼をして不朽の作品を殘さしめた。彼は、不知々々藝術の人として、努力精進したのである。之は、彼の不思議な運命の謎であつた。

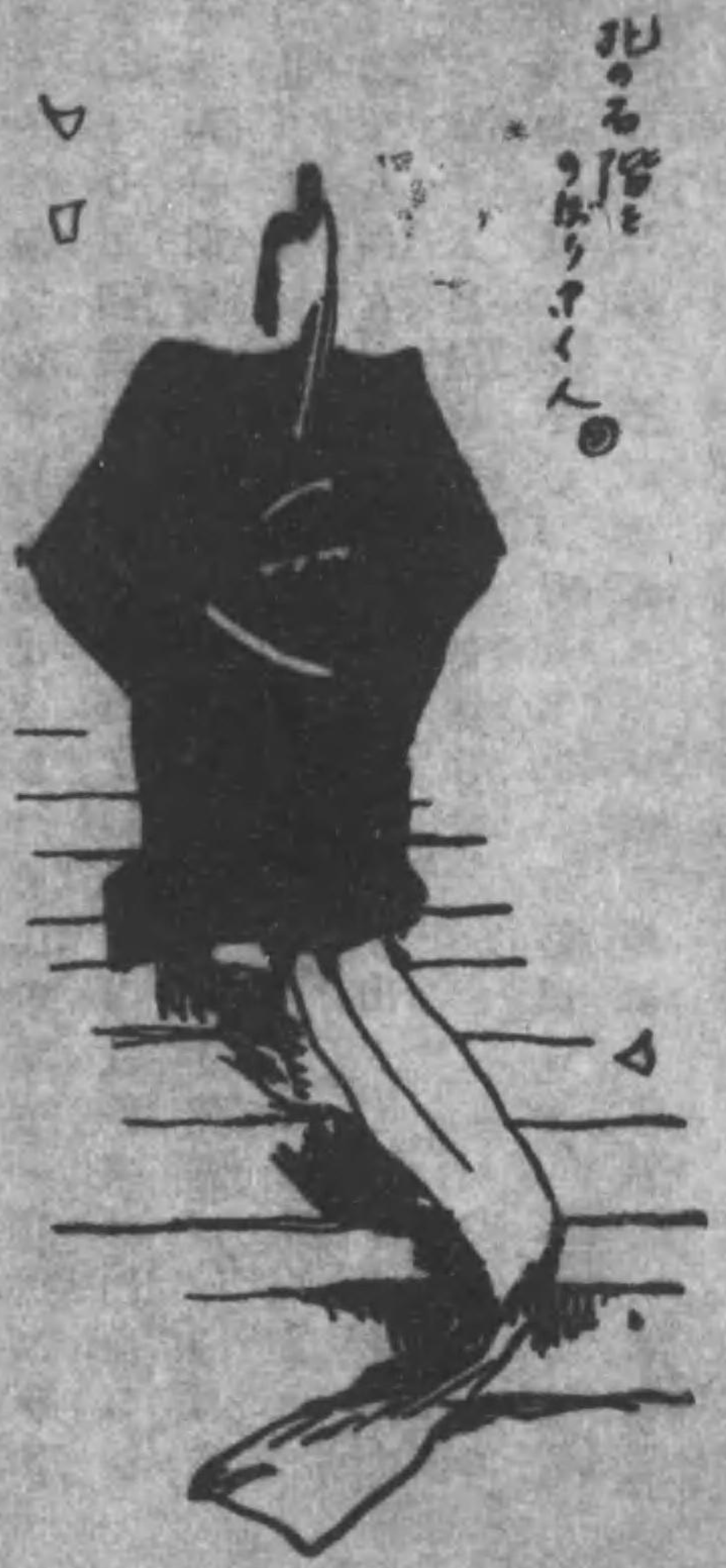
實朝が、右大臣の地位に進んだ時、公曉の眼は恐ろしく光つて見えた。承久元年正月二十七日、天地は、雪白に飾られた。此の日、實朝は、任大臣の拜賀として、鶴岡八幡宮に參詣する事になつて居た。危機は刻々に實朝の身に逼つた。

露光量違いの為重複撮影

實朝が出發する前、大江廣元は、何となく涙が流れ出て仕様がなかつた。廣元は、或凶兆を直感するやうに思はれてならなかつた。彼は、實朝に束帶の下に腹卷を着用することを勸めた。けれども實朝に侍する源仲章は、前例がないと云ふので、之に反對した。實朝も亦、廣元の言葉を用ひなかつた。

實朝は、恐ろしい運命が、自分を取卷きつゝあることを自覺しなかつたけれども、何となく危機に臨むやうな心持がした。秦の公氏が實朝の髪を結つた時、實朝は、其の鬢の毛を一筋拔いて「之を形見とせよ」と云つた。彼は又其の庭にある梅の花を見て、淋しい感想を述べた。

露光量違いの為重複撮影



實朝が出發する前、大江廣元は、何となく涙が流れ出て仕樣がなかつた。廣元は、或凶兆を直感するやうに思はれてならなかつた。彼は、實朝に束帶の下に腹卷を着用することを勸めた。けれども實朝に侍する源仲章は、前例がないと云ふので、之に反對した。實朝も亦、廣元の言葉を用ひなかつた。

「實朝は、恐ろしい運命が、自分を取卷きつゝあることを自覺しなかつたけれども、何となく危機に臨むやうな心持がした。秦の公氏が實朝の髮を結つた時、實朝は、其の鬢の毛を一筋拔いて「之を形見とせよ」と云つた。彼は又其の庭にある梅の花を見て、淋しい感想を述べた。

出でいなば主なき宿となりぬとも
　軒端の梅よ春をわするな

此の歌には、彼の最後が、明かに歌はれて居た。風流な實朝は、其の恐ろしい危機に臨んで吾知らず、恐ろしい運命に對する自然の情緒を流露した。

彼が八幡宮に社參すべく、其の館を出ると、邸の棟の上に群れて居た鳩がしきりに鳴き出した。それが何となく、不思議な印象を、人々に與へた。けれども實朝は、それを氣にかけず隨兵に護衛せられて、靜かに八幡宮の門前に着いた。其處で彼が車から出ると、佩刀の柄が、自然にポキリと折れた。感じの強い實朝は、此の時、心臟の鼓動を覺

えなかつたであらうか、彼は凶兆の豫知を感じなかつたであらうか。其の日、彼は其の拜賀の目的を遂げて、夜に入つて、下向の途に就いた。

實朝が、心靜かに石階を下りて來た時、恐ろしい公曉の姿が、突然、闇に現はれて、刀光一閃した瞬間、實朝は、既に其の生命を奪はれて居た。憂鬱の空氣に閉ぢこめられて、詩歌の殿堂に隱れた彼は、不意の打擊のために其の藝術的生活の幕を閉ぢた。悲慘なる時代の犧牲!!!

實朝の死は、源氏の正統を思ふものにとつては、最大の

悲痛であつたらう。けれども實朝自身にとつては、寧ろ不安と憂鬱との影から脫れて、寂靜な藝術の極致とも云ふべき死國に入ることを喜んだであらう。多感なる彼は、死の恐怖よりも、死の安息と平和とを憧憬したかも知れない。生活と藝術の配合は、彼をして彼の生活そのものをも藝術化せしめたのである。而して藝術の道に於ける彼の歩みは不朽に印象されたのである。

咀はれたる黒衣の公子

咀はれたる黑衣の公子

（源　頼　家）

鎌倉三代の歴史は、悲劇の連續である。權力爭奪のためには、人情も、道義も、肉身の愛も、總べて犧牲に供せられた。殊に賴朝が死んでからは、此の咀ふべき殺伐の空氣は、一層、濃密になり初めた。何人も、安んじて其の生を享樂することが出來なかつた。斯うした空氣が動搖する時代に、賴家は、父の後を繼承したのである。

「賴朝は鎌倉に於ける最大の支配者として完全な資格を持

つて居た。けれども頼家は、最初から、當時の風潮とは、全く異つた行き方をして、其の奔放な青春の情熱を、抑制しようとしなかつた。彼は、歡樂の子であつた。色彩の乏しい無趣味な生活を好まなかつた。優艶な佳人と琥珀色の美酒とに、心魂を溶かす魔醉の境地を愛した。彼は、鎌倉の中心勢力たるべき地位を占めたけれども、其の資格については、一度も考へなかつたのである。」

權力の中心に居て、而も權力なきものは、其の無爲單調に堪へ得ない。頼家は、權力の中心に居たけれども、北條の鐵の手は、自然に頼家をして、虚位を擁せしめた。頼家は、唯手を拱ねて、北條のするがまゝに任せるより他はなかつた。生の單調！　之れ頼家が最も苦痛としたところである。

「頼家は生の寂寞から來る哀愁を忘れるために。蹴鞠の遊戯を愛した。彼の精力は、其の發散すべき中心の一部を此に求めた。彼は京から蹴鞠の師として、紀行景を迎へて、一心に稽古した。彼の淋しい感じは、之がために次第に消散した。彼は、日毎に蹴鞠に身を入れて、他の一切を忘れたやうに見えた。當時の人々は、頼家が權力者としての自覺を持たずに、放逸な遊戯に耽ることを嘆いた。けれども

頼家は、之等の事を、氣にも留めずに一層、蹴鞠に心を傾けるやうになつた。」

「頼家が蹴鞠の興に吾を忘れる時、彼は、限りなき快樂を感じた。而して蹴鞠の遊戯を終ると、今度は歡樂の酒に、其の淋しい遣る瀬ない心を慰めた。彼は、心から美の世界に放浪することを喜んだ。若し誘惑の魅力ある佳人を見れば、之を自分の物としなければ滿足しなかつた。彼が安達景盛の愛妾に懸想した時は、權力者としての體面を忘れて、暴力を以て、之を吾が物とした。頼家は、最初、景盛の留

守に、其の愛妾に向つて、窃に艶書を送つたが、容易に其の操を破らうとしなかつた。青春の情熱に燃えて、戀の盲目者となつた頼家は、終に之を思ひ切ることが出來なくなつて、暴力の下に戀の成功者となつたのである。鎌倉の家人達が、斯うした奔放な態度を喜ばないのは、頼家にも、分明らないのではなかつた。けれども彼は、それ等の非難に對して、彼の情熱を抑へる丈の自制力を缺いて居た。」

「頼家は大磯の遊君を愛する中にも、愛壽の容色を愛した。彼は又た白拍子微妙を愛した。彼は、微妙の艶容に、深く魅せられた。彼が微妙を見たのは、氣も心も浮立つ櫻の季節であつた。比企能員の家で、觀櫻の宴を催ほした時、京

都から鎌倉に來て居た白拍子微妙を呼んだ。其の鮮麗な容姿は、春の夜の燭臺の光に照らされて、錦繪の中から拔け出たやうに見えた。座輿として歌うた微妙の聲は、鶯の聲にも優つて、賴家等を恍惚させた。賴家は暖い春の夜風に、其の微醉の頰を吹かせ乍ら、頻りに微妙の方に眼を注いで、深更まで時の移りゆくのを忘れて居た。此の快き印象は、賴家をして、微妙の境遇に一滴の涙を注ぐことを惜ましめなかつた。唯、微妙が、其の悲しい孤獨の境遇のために、尼となつたことは、賴家にとつて、大なる失望であつたかも知れなかつた。」

「賴家が酒と美女との世界に、心身を沈緬させる事について、漸く反對の聲が高くなつた。或ものは、之を憂ひた。或ものは之を嘲つた。或ものは、之を諫めた。けれども賴家は、これを冷笑に附した。彼は、衰え易い青春の時期に思ふまゝに歡樂に耽りたいと思つた。若し希望と情熱とに活きて居る青春の時機が過ぎ去れば、最早、歡樂の杯は、其の興を減ずるのである。柔かい佳人の手に抱擁せらるゝ快樂も、年と共に醒めゆくのである。尊重すべき青春の誇り！　彼はそれを滿足させることに努力したのである。」

けれども賴家の奔放な態度は、次第に周圍の壓迫を受く

るやうになつた。彼の母は、之を憂慮した。北條一家は、不快な眉を顰めた。殊に頼家が病むに及んで、壓迫の度は一層強くなつた。頼家は、之に向つて、強く反抗しようとした。けれども彼は無勢力の人に過ぎなかつた。

頼家の病が、一時、危篤を傳へられた時、關西三十八箇國を其の弟千幡に、關東二十八箇國を其の子一幡に與へることが、遺言として實行せられた。けれども頼家は危篤から脱れて、其の生命を取りとめた。而も之は頼家に大きな不幸であつた。

悲劇は突如として起つた。頼家の愛妾若狹局が生んだ一幡の前途について、外祖父に當る比企能員は、最初から不

安の念を懷いて居た。天下を兩分して、權柄二つに分るゝ時は、大亂の原因となる。之は、如何しても一幡に總てを讓るのが正當である、それを妨げたのは北條である。能員は斯う考へて、頼家に其の衷心を告げた。其の結果、北條を顚覆する祕策は案出せられたが、祕密は頼家の母の口から洩れて、能員も一幡も、北條の鐵の手に倒されて了つた。頼家は、心から北條の殘虐を憤つたけれども、彼は矢張無勢力の人であつた。而して其の結局は却つて北條のために伊豆に流竄せらるゝに至つた。頼家は之を拒むことさへ出來なかつた。

「頼家が、鎌倉と別れねばならぬことは、堪へ難き悲しみであつた。彼が蹴鞠の興に入つた場所からも、四季の推移に、歡樂の宴を催した場所からも離れねばならなかつた。彼が熱愛した琥珀色の酒は、彼の自由に任せぬこと〻なるであらう。惑溺すべき美女の白き手は、最早、彼の思ふままに抱擁し得られぬことになるであらう。色彩と音樂との世界は、彼の前に消えて、幽暗沈鬱の空氣は、漸く頼家に遍らんとするのである。嗚呼此の堪へ難き苦痛！ 彼は、其の苦しき運命を呪ひたくなつたであらう」。

「けれども彼は、到頭、流竄の途に就いた。前後に彼を警

護する隨兵は、彼にとつて、却つて煩はしい思ひを懷かせるに過ぎなかつたであらう。彼が一歩〳〵、鎌倉から離れゆくとき、彼は吾知らず熱い涙の頬を傳はるを覺えたであらう。北條の專權に向つて、憤りの情熱を燃やしつ〻、其の拳を握つたであらう」。

彼は、運命に呪はれた最大の犧牲であつた。彼は、父の愛に成長して、權力の地位に坐したけれども、心から彼のために擁護にあたるものがなかつた。彼の父が、其の有力な二人の弟を葬り、叔父を葬り、源氏の根柢となるべき人達を葬つた應報は、其の淋しき死と共に、頼家の頭上にふりかゝつて來た。義經の靈も、範頼の魂も、兄頼朝の冷

酷な振舞に深き怨みを持つて居た總ての人々の怨みも、やがて其の形を頼家の上に現はしたのである。頼家は何等の抵抗力なき人の如く、伊豆修善寺に押しこめられて了つた。

「修善寺に於ける頼家の最後は悲慘の頂上であつた。彼が修善寺に移つてからは、其の華やかであつた生活は、極めて淋しいものになつた。不自由と窮乏との感じは、快濶であつた頼家を憂鬱の人に變じた。享樂すべき人生は、此に其の美しい假面を取り去つて、醜い現實の悲しみを見せた。」

「彼が修善寺に居る間に、悲愁の色を帶びた冬は來た。咽

ぶやうな泣くやうな風の聲、幽鬱の鬼が音づれるやうな木の葉の散る音、夜に入つて冴えわたる物凄い月の色、之れ等は頼家をして『限りなく堪へ難き寂寞よ』と叫ばしめた。彼は、其の母政子と弟實朝の許に消息を寄せて『深山幽谷の棲居、つれ〴〵やる方もなし、せめて日頃、召使つた近習の者だけは出入することを御許しありたい』と言つたけれども頼家の望みは絶對に容れられなかつた。彼は何となく心の衰えを感じた。而して冷やかな冬が去つて、暖かい春の來るのを待ちこがれた。而も歡樂の世界は、永劫に彼の前に來ないやうにも思はれた。」

「頼家の生活について、戯曲は、種々の想像を加へて居る。彼が最終に於ける淋しい戀について、色彩あるロマンスを綴つたものもある。多恨な頼家は餘りの淋しさに、里の女を戀したかも知れない。けれどもそれは、はかなき心の戯れであつたらう。彼の全心に悦びを與へるに足らなかつたらう」。

「彼は、春が來ても、哀婉の感じに打たれたであらう。花が散つて、青葉の季節に入つても、その憂鬱を消散することが出來なかつたであらう。其の前途には、何の光明もなければ、希望もない。僅かに孤獨の感じを懷き乍ら、其の

生を續けるに過ぎなかつたであらう。過去の華やかな生活に對する追懷の情は、時として、彼の胸に浮んで、苦しき涙となつたであらう。『淋しく咀ふべき生よ。』彼は、斯う叫んだであらう」。

「彼が最後の運命は、終に來た。義時の指圖によつて、豫め頼家を剌殺する準備は、成つて居た。憐むべき頼家は、敵のために浴室へ誘ひ入れられて、急に其の生命を奪はれた。彼が最後の激しい抵抗も、彼をして敵の毒手から脱れしめることが出來なかつた。美しく脆い彼の生は、父が冷やかな殺戮の應報として、此に現はれたのである。彼は生れ乍ら、咀はれた黒衣の公子であつた」。

不思議な女性

不思議な女性

（常磐御前）

總て Conventional な道をゆく女性には、不思議もなければ、疑問もない。すべてが同じやうな色彩で蔽はれて居る。けれども衆俗の眼から見て、甚だしく不合理で、矛盾したやうな道をゆく女性に對しては、何となく疑問の雲が、かゝるやうに思はれる。遠い昔の保守思想に囚はれた人々は、殊に其の矛盾の女性に對する反感が强かつたであらう。

「不思議な霧の中から、靜かに其の艶容を出した常磐御前

の魅力ある眼には、悩みの影がある。彼の女には、當時のConventionalな女が、到底、想像し得ぬ悶えがあつた。貞操の勝利に憧憬れた意志の女とは、全く趣を異にした運命の桎梏があつた。彼の女は、あらゆる嘲りと罵りとを想像し乍らも、其の子に對する執着の愛によつて、堪へ得ざる屈辱の前に跪づかなければならなかつた。悶えの沈默に消えゆく豐婉な女性の悲み！」

　常磐の前半生は、波瀾に乏しい平坦なものであつた。義朝に愛着せられて、其の間今若、乙若、牛若の三人を設け

たと云ふ丈である。けれども其の平和は、義朝の敗北によつて、思ひがけなく破られた。辛うじて義朝が逃れ去つた後に取り殘された常磐は、全く途方に暮れた。若し此の儘ヂッとして居れば、何時、平家の手に捕へられて、悲慘な結末を見るかも知れない。彼の女は、其の子の愛にひかれて、人目を忍びつゝ大和の片田舍にかくれた。何事にも不自由な生活は、都の空氣に親しんだ常磐には、堪へ難い苦みであつたが、三人の子の罪のない笑顏を見ると、流石に慰められた。彼の女は、其の姿を何日までも敵に見出されないやうに、神佛に祈願した。

　其の後、日數が經つて聞くと、平家は、常磐の行衞が知

れないので、何も知らぬ彼の女の母を無殘にも六波羅に引立てたと云ふ噂がある。罪もない老いた母が、自分等のために殘酷な犧牲となることは、常磐自身の生命を失ふよりも、倘ほ苦痛であつた。けれども若し母を救ふために、六波羅に行けば、今まで追窮せられて居た義朝の忘れ片見の三人は刺殺せらるゝかも知れないのである。それにしても到底、逃れ得ぬ運命が、刻々に彼の女に迫つて居る。彼の女は、到頭、一切の恐怖を排して先づ母を救ひ出したい一念から、京にひきかへした。其の途中、何も知らぬ愛兒が敵の前に出て恐ろしい運命に逢ふかも知れぬのを何とも思はずに嬉しげな顏をして居るのを見ると、身を切られるよ

りも酷かつたであらう。

「六波羅に赴いた常磐は、涙に咽んで正體がなかつた。彼の女は其の涙の中に三人の子と自分とが犧牲となつて、母を救ひたいと嘆願した。彼の女は、最早、覺悟を極めて居たが、矢張、涙の止め度がなかつた。清盛は、悲みに沈む常磐の哀婉な風姿に吾知らず恍惚となつた。最初、三人の子を葬り去る決心で居たのが、眼前に肉附の宜い纖麗な白い肌を有する姿を見ては知らず〳〵誘惑の魔力に魅せられて、自然に其の烈しい心を柔げられた。清盛の周圍は、未

來の危險をおもつて、寧ろ冷かに其の敵の片見を葬ることを勸めたが、其の切なる勸めも、清盛の耳には入らなかつた。美の魔酔は、何時か清盛の胸に喰ひ入つて居た。

「常磐が其の母と子との助命を得たとき、夢ではないかと疑つた。必死の運命を豫期した前には、今の喜びが、如何しても事實でないやうに思はれた。何となく、清盛の心の奥に、或恐ろしい秘密が潜んで居るやうに見えた。けれども其の秘密が、彼の女に對する懸想であると知らなかつた。喜びの餘りに、それを思ふ餘裕さへなかつた。」

許された常磐は、京の一隅に淋しく生活しつゝ、其の母に仕へ、三人の子の生長するのを待ちわびた。清盛からは折々、常磐の許へ手紙が來た。今まで何となく不安に思つて居た秘密は、之で分明つた。其の手紙には、戀情の切なさをほのめかしてあつた。『吾が思ひを察して呉れ』とあつた。常磐は、何となくそれを咀ひたいやうな屈辱を感じた。彼の女は、それに對して、唯沈默するのみであつた。

けれども一度決心した事は、何處までも實現せねば止まぬのが、清盛の性格である。常磐の沈默は、如何に長く續いても、矢張、其の手紙を送ることを止めなかつた。其の背後には、三人の子の運命に向つて、恐ろしい威嚇が潜ん

で居た。餘りに手強く清盛の意志に背くと、愛兒の生命は速座に奪はれるかも知れないのである。さればとて貞操の勝利を尊重する當時の思想に裏切して、今までの美しい生涯に大きい黒點を殘すことは、地下の義朝にも濟まぬと思はれた。操の勝利が、人一倍愛らしく育つた、愛兒の生命を失ふ原因となることも亦重い苦みであつた。彼の女は、その事にのみ苦慮した。『自分は既に此の世から葬られたものと思つて、犧牲となつて倒れよう』と決心した。而して終に切實な子の愛にひかれて、横暴な清盛の意志に從ふやうになつた。けれどもそれは心まで清盛に從ふたのではなかつた。

「常磐の心は、絶えず病んだやうであつた。けれども其の豐艶な肉體と、長い美しい黒髪とは、何處となく、多情の男を引付ける魅力を持つて居た。清盛は、其の美に誘惑せられて、三人の敵の子が次第に成長するのを、左程、心にとめようとしなかつた。常磐は、其の愛兒が、平穩に成長するやうにとの切なる望みから、今若にも、乙若にも出家させた。最後に可憐な牛若さへも、十一歳の時、鞍馬寺の僧覺日に托した。」

「常磐の心は、其の愛兒の平和な生涯を見て、重い惱みが

稍薄らいでゆくやうに思はれた。それにしても、貞操の勝利は、全く清盛の爲めに蹂躙られて、其の間に子さへ設けた淺間しさよ、自己の意志の餘りに弱きを嘆いた。子の愛に引かれて、彼の女は、淋しい犧牲となつて了つた運命の桎梏を悲んだ。

常磐は、一時、清盛に愛せられたが、其の子を產むと共に幽艶な容姿も、次第に衰え初めた。多情な清盛は忘れたやうに常磐を捨てた。常磐は、それがために心は進まぬ乍らも、大藏卿藤原長成に嫁せねばならなかつた。此の再度の屈辱は、常磐にとつて、心の傷の痛みを增さしめた。けれども彼の女は、三人の子のために、はかない生命を保ちつゝ、不滿足な生涯をつゞけた。

傳說に現はれた常磐は、唯それ丈である。けれども彼の女の內面生活は、義朝に別れて以來、絕えざる惱みに襲はれて、孤愁、不安、動搖を續けて居た。『多情の女、操を知らざる女』と云ふ嘲りは、彼の女の一生を蔽ふたのであるが、彼の女自身には、人知れぬ犧牲的精神のために、一切を捧げたところに、悲しい滿足が幽にほのめいて居たのである。

愛と力

愛と力

（政子）

イブセンの戯曲には、意志の強い女性と、獻身的な暖かい女性とが、描かれて居る。『ロスマースホルム』に現はれたリベッカは、主我的の意志に固められた女である。『亡靈』に現はれたアルギング夫人は、Conventionalな思想の下にある犠牲的の女である。此の二人は、何れも極端であるが、其の結果は、闇黑の中に葬り去られて了つた。

頼朝と戀に落ちた政子の一生は、不思議に強い意志と、

犧牲的精神とが、調和せられて居る。彼の女は、男性的なシッカリした強烈な意志を持つて居た。其の意志に反抗するものは、之を排除しようとする態度を持つて居た。けれども彼の女は、矢張、時代精神の大波から、別に離れて存在することが出來なかつた。鎌倉時代の女性は、特に犧牲的の精神に富んで居た。男子の前に於て、自己の戀と貞操とを擁護することを忘れなかつたが、その主君、その夫に對しては、極めて誠實で、或點までは、沒我的の傾向を持つて居た。政子も亦、斯うした時代精神の影響を受けた爲めに、其の一生は、何等の破裂なくして、平和に終つた。

　政子の生涯は、愛の記錄であると同時に、人格に活きた歷史であつた。總ての婦人は、愛に活きて居る、政子は、愛に活きる他、人格に活きた。賴朝が居る間は、愛の生活を中心として居た。けれども賴朝が世を去つてからは、愛のみに活きて居られなかつた。彼の女の地位は、社會的の意味を帶びて、政治舞臺の內面に動かなければならなかつた。彼の女が、人格に活きたのは、此の時から始まつたのではないが、此に至つて、一層、その人格の力を表現するやうになつた。從つて彼の女の生涯は、普通の女に比較すると、變化が多く、單調ではない。

彼の女の前半生――賴朝が居た時代――は、平和な時が多かつた。戀のために一時、世の荒波に揉まれたけれども、賴朝が、覇府の基礎を鎌倉にすえてからは、安らかな生を樂んだ。けれども其の後半生は、權力爭奪の暗黑な時代に逢つて、種々の惱みが多かつた。政治の圈內に這入つて、內外の調和を計るについて、人知れぬ苦みが多かつた。絕えず不安な空氣が、彼の女を包んで居た。斯うした生活の中に於て、彼の女は常に殺伐に傾かうとする鎌倉武士の間に、暖かい人情の泉を導き入れて、ともすると起り易い爭ひを融和するに力めた。此の前後の生涯を對照すると、彼の女の個性が、自然に浮び出て居るやうに思はれる。

「暖かい伊豆の國は、戀のロマンスを生みやすい國である。麗明な山河、青い海は、戀の惱みも喜びも、平等の笑顏を以て迎へるやうに見える。政子は、此の戀の國に生れて、北條の館で二十一歲の美しい娘となつた。」彼の女は、早く其の母に別れて、繼母の手で育てられた。聰明な彼の女は、學問技藝の趣味を知つた、種々の物語にある戀の喜びと悲しみとを知つた。時政は、此の聰明な長女を、深く愛し、北條家の寶物として傳へられて居た支那の鏡を與へた位である。

「政子は、二十一歳まで、戀を思ひ乍ら、戀をせずにすぎた。彼の女は、未だ見ぬ夫の俤に憧憬れて居たが、未だそれと定める人がなかつた。唯、美しい物語の中に、彼の女が、それかと思ふ人を夢みて居たのであらう。」

「彼の女の夢見た戀人にふさはしいやうな青春の貴公子が、彼の女の家に身を寄せることになつた。その貴公子は青春の希望に輝いた頼朝であつた。政子は、此の漂泊の貴公子が、何處となく、非凡の風采を具へて、未來の光明を有するやうに思はれた。此の直覺は、政子をして、熱烈な戀の味を覺えしめた。」

「政子の心は、頼朝の心に共鳴を與へたであらうか。政子は、心の中で、深く頼朝に戀したのであるが、それを頼朝に通ずることが出來なかつた。唯、日毎に戀の憧憬を繰返すのみであつた。人知れず焦慮ても、二人の間を繋ぐ連鎖がなかつた。」

或日、政子は、其の妹の口から、不思議な夢の話を聞いた。それは、何處とも知れぬ高山の嶺に登つて、二つの袖に月と太陽とを包んで、手には多くの實が生つて居る橘の枝を提げた處であつた。政子は、興味を以て其の夢物語を聞いて居たが、不圖、斯う云ふことをおもひ出した。昔、垂仁天皇の皇后日葉酢媛命が、橘の實を食べて、景行天皇を御生みなされた。此の傳説から想像すると、妹

が見た夢は、何となく或る吉兆のやうに思はれた。それに二つの袖に太陽と月とを包んだのは喜びの豫報のやうに直覺せられた。

聰明な政子は、早くも此の吉夢を、妹から讓り受けようとした。『昨夜の夢は、不幸の前兆かも知れませぬ、凶夢は、七日話すなと云ひますから、若し不幸でも起つたら：：』と、妹の恐怖を喚び起さうとした。それとは知らぬ妹は政子の言葉を信じて目前の恐怖から逃れ得べき方法を尋ねた。政子は云つた『其の夢を誰にか御賣りなさい』妹は終に欺かれて、其の吉夢を、政子に賣つた。政子は、自分の望み通りになつたので、かねて父から貰つた大

切な唐鏡に着物を添へて、妹に贈つた。

其の夜、政子は、夢の中に一羽の白鳩が、黄金の文箱を銜へて、飛んで來るのを見た。其の文箱の中には、賴朝の文があつた。政子は思つた『鳩は源氏の氏神八幡樣の使であるから、何か吉兆が遠からず事實となつて現はれるであらう』と。

「政子が吉兆を信じた夢は、やがて彼の女の戀の成功となつて現はれた。政子が夢から醒めて、何となく喜ばし氣な顏をして居た朝、賴朝の家來が、ソッと一封の手紙を政子

に手渡した。其の手紙には、戀に燃ゆる頼朝の心が、巧に書いてあつた。かねて憧憬れた戀人が、自分に其の心の底を告げて寄越した喜びに、政子は、幸多き戀の前途を、今、わが前に描くやうにして、ウットリとなつた。

「彼の女は、未だ父の許しを得なかつたけれども、戀には、流石に其の強い氣象も柔かになつた。春の曙に逢つたやうな、イソ〳〵した心持で、頼朝への返事を書いて、心から喜びの情緒を述べた。非凡な貴公子と、非凡な佳人との戀は、斯うして成立つた」。

傳説によると、最初、頼朝は、伊東祐親の長女と戀に落ちた爲めに、豫期せざる危險に逢つたので、北條の家でも

長女の政子よりは、次女に懸想しようとした。けれども彼の家來は、醜い次女よりも、優れて美しい長女の方が、頼朝の妻にふさはしいと思つて、ソッと手紙の宛名を政子にかへたと云ふことである。此の事が、政子の夢を買つた事や、白鳩の夢と深い關係を持つて居るのを見ると、此の戀の成功は、矢張、最初から頼朝と政子とを接近させるやうに定められて居たのであらう。運命は、自然に彼等を祝福したのである。

戀には、種々の妨げがある。政子と頼朝との心が固く結

露光量違いの為重複撮影

ばれた時、其の父時政は、京都に在番して居て、二人の間に戀の成立つたことを知らなかつた。任期が滿ちて、歸る途中、同じ道伴れの山木兼隆に、自分の長女政子を嫁せしむる約束を結んだ。

時政が、家に歸ると、政子は、最早、頼朝の物になつて居た。時政は、一時、驚いたが、ツク〲考へると、頼朝は、未來ある非凡の貴公子である。それに北條の先祖の中には、源頼義の妻となつて、八幡太郎義家を生んだ事さへある。斯うした關係から、時政は終に頼朝と政子との戀を許した。けれども兼隆への約束があるので、素知らぬ顏して、一旦、政子を兼隆の許に嫁せしめようとした。

ばれた時、其の父時政は、京都に在番して居て、二人の間に戀の成立つたことを知らなかつた。任期が滿ちて、歸る途中、同じ道伴れの山木兼隆に、自分の長女政子を嫁せしむる約束を結んだ。

時政が、家に歸ると、政子は、最早、賴朝の物になつて居た。時政は、一時、驚いたが、ツク〴〵考へると、賴朝は、未來ある非凡の貴公子である。それに北條の先祖の中には、源賴義の妻となつて、八幡太郎義家を生んだ事さへある。斯うした關係から、時政は終に賴朝と政子との戀を許した。けれども兼隆への約束があるので、素知らぬ顏して、一旦、政子を兼隆の許に嫁せしめようとした。

政子は、最初から、兼隆の許にゆくことを手強く拒んだ。それでは、時政の面目が潰れて了ふので、父に強ゐられて一時、兼隆の家に花嫁となつて至つた。けれども其の夜、彼の女は、侍女を伴うて、ソッと兼隆に別れて、雨降りしきる暗の中を一心に急いで頼朝の許に走つた。

戀には、種々の妨げがある。政子は、兼隆の手から逃れて、頼朝の許に至つたが、其の濃密な戀の日も、永くは續かなかつた。二人の心には、何の變化も起さなかつたけれども、時代の大波は急に押寄て、頼朝が靜かな戀の夢に耽

ることを許さなかつた。源氏の先驅者頼政の死は、平家をして、第一に頼朝の生命を奪はうと決心せしめた。若し其の勢の動くまゝに任すと、頼朝は、間もなく亡びて了はなければならぬ。頼朝は決死の覺悟で起上つた。其の結果は、やがて石橋山の決戰となつた。

政子は、頼朝の身を氣遣つたが、戰場に出ることは出來なかつた。唯一人、心淋しく伊豆山權現に殘つて居た。けれども敗北した頼朝からは、何の消息もなかつた。政子は其の消息に接せぬのを憂ひて意志の強い彼の女も、未だ娘氣の弱さに、覺えず泣きくづれた。政子は、一心に其の夫の幸運を祈つて、再び顏を見ることの出來るやうに平和の

日の來るのを待ちこがれた。

平和の日が來た。頼朝の生涯は、一轉して天下の政權を其の手に左右するやうになつた。政子が處女時代の初戀から、夫に別れて、一時、孤愁の日を送つた苦みは、やがて滿足の情緒に變つた。彼の女は、内部から、頼朝を助けて獻身の誠を捧げた。

頼朝が此の世を去つた後、政子は尼になつたが、彼の女の地位は、政治的の色彩を帶びるやうになつた。頼朝の子頼家の放蕩は、政子に、種々の憂慮を與へた。不安動搖の

中に、其の源氏の命脈を維持せんとする努力は、婦人にとつて、重荷であつたけれども、彼の女の意志は、總ての支障を排して、能く前途の運命を開拓することが出來た。彼の女は、頼朝に先立たれてから、多くの悲劇を見た。彼の女が、其の夫の片見とも思ふ頼家は、色彩と音樂の世界に憧憬れて、到頭、權勢の中心から葬られて了つた。彼の母としての私情からは、頼家を修善寺に流離の身とならしめたくはなかつた。けれども政治上の意味から、此の切なる愛を自ら抑制して、頼家の淋しい生涯を靜觀しなければならなかつた。而して頼家が、義時の秘策によつて、其の生命を奪はれたとき、政子は、前後も知らずに泣きくづ

れたいのを、ヂッと堪へ忍ばなければならなかつた。頼家の後を繼いだ實朝こそは、鎌倉の中心となるであらうと思つたことも、やがて事實に於て破られて了つた。のみならず、不意に公曉のために襲はれて、悲痛な最期を見せた。此の出來事も、政子にとつては、大きい打撃であつた。源氏の正統が絶えゆく悲み、愛兒と愛孫——公曉——の亡びた悲み、之等が錯綜して、政子の胸に限りない痛みを與へた。それさへも、彼の女は、ヂッと抑へて、之を堪へ忍んだ。

斯うした悲みの波に浸り乍ら、彼の女は、其の強き意志に鞭つて、政治の内部に、一個の主要勢力となつて、頼朝

の志を空しくせぬように心がけた。それが彼の女の最期まで少しも變らなかつた。其處に彼の女の獻身的努力があつた。

政子の前半生には、艶麗なロマンチックの氣分が漂うて居るが、其の後半生は、荒涼な幻滅の色が浮んで居る。斯うした變化の急なる人生に於て、彼の女が、次第に世味の經驗を重ぬると共に、意志の力を深く強くしたところを見ると、何となく、其の人格の偉大に打たれざるを得ない。外部に於ける現世の矛盾、內部に於ける心の苦鬪、此の二

つを統合して、少しも動搖しなかつたのは、慥に女性としての彼の女の人格が、特別に光と力とに輝きつゝあるを示すのである。彼の女が幻滅の人生に於て、悲みの最後から脫却し得たのは之がためであつた。彼の女は、鎌倉時代が生んだ最も非凡な女性であつた。

淋しき犠牲

淋しき犧牲

（源範頼）

自我の擴充、生の創造を叫ぶ近代人と、犧牲、獻身に甘んじた沒我主義の鎌倉時代の人々との間に、非常な距離がある。彼等は、必ずしも自我を認めなかつたのではないが、其の主君や、父兄のために、自我を殺して、獻身の誠を捧げることを、正しい道であると感じて居た。當時の人達は、斯うした行爲を讚美したのである。

沒我の人範頼の生涯は、自己中心主義者頼朝の犧牲とな

つた記錄である。範賴は、極めて謹嚴な人であつた。彼には、相當の力量があつたに關らず、成るべく其の自我を抑制するやうにして居た。同じ血をわけた兄弟でも、義經は、或點まで、自我を擴充して、不羈奔放な情熱の動くまゝに行動して、少しも憚る所がなかつた。天馬が空を驅るやうな勢を示した。けれども範賴は、前後を顧慮して、何事も控へ目に行ふた。戰場に於ける義經は、時として、賴朝の意志に就いて考へることを忘れたのみならず、其の周圍に居る人々の意志をも冷かに見ることが多かつた。彼は、自我の力を信じて突進した。範賴には、それが出來なかつた。彼は、賴朝の意志を尊重した、其の周圍の人々の意志をも重んじた。彼は自我を或程度まで殺して進んだ。斯うした相違があるけれども、其の賴朝の犧牲となつて、亡滅の谷に投げこまれたのは同一であつた。

戰場に於ける範賴は、自分の事を忘れて、平家を倒す事に全力をあげた。その應報として彼は一時、賴朝に愛せられた。それは誠に一時であつた。やがて賴朝の猜疑の眼に睨まれて次第に其の亡滅の道に急いだ。其の最初の動機は、義經と賴朝との不和から來た。自己中心主義の賴朝は、義經の奔放な天才的行動を喜ばなかつた。殊に義經の戰術が

魔力の如き神速奇警を發揮したことを子孫のため『他日の恐怖』なりとして呪つた。義經が、平家を倒すために働いた功勞は、少しも知らぬかのやうに思ひきつて殘忍な冷遇を與へた。温和しい範頼は、此の兄の處置を不自然で合理的でないと感じたけれども、强ゐてそれを止めるには從順に過ぎて居た。範頼は、暖かい親みのある義經が、何の罪もなく、腰越から京に追ひかへさるゝのを、いたましく思つた。

頼朝は、範頼が義經に深酷な同感を寄せつゝあることを知らず顏に、『憎むべき義經の生命を奪つてくれまいか』と迫るやうに云つた。義經が京に追ひかへされたのさへ、憐

れさが身にしみたのに、今又た何の罪もない義經を、肉身の血を分けた自分が如何して冷かに殺すことが出來よう。範頼は、總てに從順ではあつたが、これのみは、何と思はれても、頼朝の命令に背いた。

けれども頼朝の冷かな心は、範頼が、自分の命ずることを實行しないで、徒に兄弟の私情に驅られて躊躇するのを不快に思つた。『さらば御身も、やがて九郎(義經)の二の舞を見るであらう』と斯う薄氣味のわるいことを云つてヂロリと範頼を見た。それでも、範頼は、義經を討つに忍びなかつたのである。此の事から、彼は、漸く頼朝から、猜疑の眼を向けられるやうになつた。

若し範頼が、運命の克服から逃れようとするには、唯、現世から離れて、宗教界の人となる他はなかつたであらう。當時、最大の權力者たる頼朝に向つて、劍と楯とを以て爭ふならば、瞬間に亡滅するばかりであつた。さればとて、頼朝の意志の前に、尙ほ從順の誠意を捧げて跪づいて居ると、次第に不安危惧の空氣に包まれて、やがては義經と同一の運命に陷らねばならぬのであつた。

けれども範頼は、自我の擴充について、少しも考へなかつたのみならず、はじめから自我を滅して居たので、宗教

界の人となつて、囚へられた自己を解放して、新しく蘇生させようとする考へは殆んどなかつた。さればとて、敗北を豫期し乍ら、兄に向つて、手強い反抗の氣勢を示すことも出來なかつた。彼は唯、何の異志なきことを表明するために、起請文を頼朝の下に差出した。それは、頼朝の心の奧まで融和させるだけの力がなかつた。矢張、頼朝から猜疑の眼を以て睨まれつゝあつた。

範頼が、其の兄に從順な謹み深い態度を以て對しつゝあつた時、思ひがけない事變が起つた。建久四年五月、富士

の狩場で、曾我兄弟の復讐があつた。當時、『鎌倉殿が討たれた』と云ふ噂が頻に聞えた。其の噂のために、政子は、驚きと悲みとに打たれて、顔色も青ざめんばかりに見えた。範頼は政子の心痛に同感して、何心なく、『範頼が斯うして居るからには、決して御心配なさるな』と慰めるつもりで云つた。その言葉の中には別に深い自負の意味を含むのでもなく、頼朝を輕く見た爲めに發したのでもなかつた。政子の悲みを柔げるためであつた。

けれども其の事を、後で知つた頼朝は、範頼の言葉を、惡い方の意味に解した。何となく範頼の心底に暗いことがあるやうに見た。之がために、範頼の存在は、更に危くなり初めた。

『範頼に謀反の意志がある』

此の噂が、頼朝の耳に入つた。誰が此の噂の噂を作つたか分明なかつた。其の幕の後には、何となく梶原景時が潛んで居たやうに傳へられた。頼朝の弱味につけ入るに巧な景時は、既に義經を傷けた。彼の毒を含んだ言葉は、更に範頼を傷けんとしたと云はれて居る。

此の噂は、範頼にとつて、全く意外であつた。彼は晝夜、兄の心を柔げることにのみ考へて居た。謀反するには、餘りに自己を滅却しすぎて居た。彼の謀反の噂が起つたとき、範頼は、更に誓書を作つて、頼朝の許に差出して、他意な

きことを神明に誓つたけれども、それは却て頼朝の激怒を誘發するに過ぎなかつた。其の書中に『源範頼』とあるのを『潛越の行動ぢや』と鋭く罵つた。大江廣元等は、頼朝の弟が『源範頼』と名乘るのを、正當と見て、その事を直言したけれども、義經を強ゐて葬り去つた頼朝は、範頼の存在をも『他日の恐怖』として、之を亡ぼす口實を求めて居たのである。今は恰度、不自然な口實の下に、範頼を葬るべき機會と見た。範頼の存在は、更に危機に向つて、一步を早めた。

範頼は、正に一大轉回を試みるべき場合に臨んだ。けれども彼は運命の征服に反抗せんとする意氣に乏しかつた。恐るべき頼朝の殘虐な胸中を、鋭く見破るには、餘りに從順にすぎて居た。彼は、頼朝よりも寧ろ謀叛の噂を作り出した讒者の毒舌を憤つた。而して頼朝の勘氣を蒙つたのを、何よりも憂慮した。彼はヂッと瞑目し乍ら、考へこむより他はなかつた。

範頼が憂愁に沈むうちに、彼にとつて又最大な打擊となつた事變が起つた。範頼の從者は、はじめから、其の主人が、いろ〳〵の惡い噂のために、罪なくて憂愁に沈みつゝあるのを心外に思つた。必竟、讒者の毒舌によるのである。

露光量違いの為重複撮影

それにしても、何日になつたら、鎌倉殿の御心が晴れるのであらう、其の日の來るのが待ち遠しい。彼等は、それのみ心にかけて居た。

折柄、幕府に怪しい者が忍び込んだと云ふ報知があつた。其の怪しい男は、範頼の從者當麻太郎であつた。主人思ひの當麻は、頼朝が、自分の主君を如何に處置せんとするか、何とかして早く其の消息が知りたいと、一心におもひつめた末、竊に幕府に忍び入つて、頼朝が寢所の床下に蹲踞つて居た。今にも主人範頼の事について、何か云はれたら、片言でも聞きもらすまいと、耳を聳てゝ居た。それを頼朝が發見して、鎌倉中の騷動となつた。『幕府に曲者が忍び入

露光量違いの為重複撮影

それにしても、何日になつたら、鎌倉殿の御心が晴れるのであらう、其の日の來るのが待ち遠しい。彼等は、それのみ心にかけて居た。

　折柄、幕府に怪しい者が忍び込んだと云ふ報知があつた。其の怪しい男は、範頼の從者當麻太郎であつた。主人思ひの當麻は、賴朝が、自分の主君を如何に處置せんとするか、何とかして早く其の消息が知りたいと、一心におもひつめた末、窃に幕府に忍び入つて、賴朝が寢所の床下に蹲踞つて居た。今にも主人範頼の事について、何か云はれたら、片言でも聞きもらすまいと、耳を聳てゝ居た。それを賴朝が發見して、鎌倉中の騷動となつた。『幕府に曲者が忍び入

つた』と云ふ叫びと共に、多くの武士は、四方から集つた。而して其の捕へられた曲者の顔を見ると、範頼の従者で勇士の名がある當麻と分明つたのである。

此の不意の出來事は、『愈々範頼に謀叛の志があるに違ひない』と云ふ結論に達せしめた。當麻が、自分獨りの考へで、主人の安否を知らうとして、床下に忍んだと云ふ告白のみでは、其の儘にすまされない、何か其處に深い意味があるやうに解せられた。其の背後には、必ず範頼が潜んで居ると見做されて了つた。而して當麻は薩摩へ流竄せられたが、範頼は、内部から起つた不意の出來事のために、到頭、伊豆修善寺に幽囚の身となつた。最早、もがいても、

焦慮つても、又如何に叫んでも、彼は暗鬱な境涯から逃れ得ないのである。

範頼には、此の人生が、『不可解の謎』のやうに思はれた。彼は、頼朝のために、あらゆる辛酸を嘗めて、平家を倒すに充分の力を發揮したるにかゝはらず、其の應報として『謀叛者』の名を與へられた。『何人の感情をも害せず、敵を作るべき放恣な振舞もせずに、讒者の毒舌に倒れなければならぬとは、餘りに殘酷な運命だ、自分には、如何しても分明らない。頼朝に對して誠實な自分が、義經と同様の不興

を被る筈がない、或は自分が夢を見て居るのではあるまいか、夢ならば直ぐ醒めてくれ』範頼は、自ら惑ひ、自ら怪んだであらう。けれども彼の力は、此の既定の事實を顚覆することが出來なかつた。日夜悶えつゝある中に不意に梶原景時等に襲はれて、自滅して了つた。彼の一生は『不可解の謎』である。少くとも範頼にとつては、左様であつた。

「範頼よ、御身は、餘りに自我を沒しすぎた。自己中心主義者の頼朝に對して、最初から最終まで、少しも其の命令に背かうとしなかつた。自己の滅亡に對して、之を手強く防がうともせずに、次第に沈みゆく暮れの太陽の如く、其の生存の光を稀薄ならしめた。義經が花やかな印象を殘し

たのにひきかへて、御身は淡い淋しい印象を殘して、此の世を去つた。御身の事を思ふと、靜寂の秋の夜に、心細げに啜り泣く蟋蟀の運命に思ひ至らざるを得ない。御身が餘りに自我を沒却したことは、御身をして、淋しい生涯のページに、憂愁の足痕を印せしめたのである。

復讐より亡滅へ

復讐より亡滅へ

（公　曉）

如何なる人も、不思議な運命の支配から、全く脱却することは出來ない。神祕詩人イエーツは『宇宙には大なる精靈があつて、永久に亡びざる力を以て人間を支配して居る』と直觀した。此の力は、ソッと人知れず、支配せんとするものゝ左右に忍び込んで居る。多くの場合に於て、人は其の支配の下に呻吟きつゝある。若し此の運命の力に反抗せんとするものは、破滅に終る。

頼家の子公曉は、呪はれた運命の孤兒であつた。彼は英雄頼朝の孫と生れて、風にも當てられぬほど、平和な空氣の中に育つた。けれども四歲の時、突然、悲みの印象を殘した頼家の死は、彼の生涯に強い打撃を與へると共に、拭ひ去ることの出來ない痛恨の感じを殘した。

當時、公曉は、未だ善哉丸と云つて、かすかに小さい胸に父の死を印象せられても、泣きくづれるほどの感じに打たれなかつたであらう。祖母の政子が、悲嘆に沈む顔を見て、自分も何となく其の心持に引入れられるやうに感じ乍ら、無邪氣な遊戯に氣を引かれたであらう。けれども彼が漸く成長して、周圍の事情が分明つて來ると、彼の父は、

何故窮死したのか、何人が彼の父を刺殺したか、斯う云ふ疑問が湧き出づると共に、乳母の口から、それとなく、悲痛な父の境涯を聞くに及んで、其の敵こそは、義時と實朝であることを知つたであらう。『嗚呼若し父が居たら』と彼は、憤りの叫びをあげたであらう。彼が悲劇は早くから此に根ざして居る。

公曉は、平凡な少年ではなかつた。其の骨組や様子は、何處となく、手強いところがあつた。キッと結んだ脣、輝く眼、眉のあたりに閃く勇敢の氣は、彼が武人として望

み多き前途を暗示した。殊に早くから鎌倉の空氣を呼吸して、幼い時に多くの勇士を見た印象は、彼をして英雄崇拜の情熱を旺ならしめ、自分も武人として花やかな生涯を送りたいと、子供心にも思ひ込んだであらう。

けれども彼の希望は、彼が賴家の遺兒であるために、其の非凡な風采氣象のために、却つて周圍から押潰されやうとした。彼の祖母や、乳母は人形のやうに彼を愛して、其の前途を祝福した。けれども鎌倉の平和を思ふ家人は、公曉の非凡な樣子を見て、實朝の存在を危うする動亂の火蓋を切りはしまいかと憂慮した。若し公曉が大人となつたら、如何な Revolution の大波を惹起すか分明ないと云ふやうに、

『未來の恐怖』として、彼を眺めた。其の結果、公曉は、心にもない僧房生活を強ゐられた。

公曉の胸には、少しも宗敎的信念もなければ、人生に對する哲理趣味もなかつた。父の死は、彼にとつて、大きな憤りと悲みである。けれども之がために、厭世悲觀の心を起さうとはしなかつた。彼は、少年の元氣にみちて、劍と楯とを以て、花やかな功名を現はしたいと憧憬れたであらう。斯うした水々しい心で居る野心の多い少年にとつて、僧房生活は、歡樂の都から、幽暗な孤島に流竄されるに比

しい苦みであつたかも知れない。
彼の祖母は、周圍から迫られて、終に公曉に圓城寺に赴くことを勸めた。公曉には、既に佛學の素養は、幾分か與へられてあつた。けれども彼が執着しつゝある武家生活を離れて、其の美しい黑髮を剃り落して、はるばる親みの少い京に赴いて、寂寞たる僧房に入ることは、重い苦みであつた。
彼は、圓城寺に赴いて、明王院僧正公胤の指導を受けた。聰明な彼は、僧正の前に於て、熱心に其の教に耳を傾けるやうに裝うて居た。けれども彼の心は、他の事を考へて居た。僧正の慈愛に滿ちた暖かい戒めは、野心に燃え、復讐

の一念に燃ゆる彼を動かすには、餘りに遠いものであつた。
彼は、佛學の研鑽よりも、武術の稽古に浮身を窶した。
「公曉の僧房生活は、彼に何の安心をも與へなかつた。其の強い執着心は、佛の道に入つて、根柢的に忍辱の心を植ゑつけることが出來なかつた。灯ほのぐらくまたゝくしめやかな僧房の夜、淋しく身に泌む鐘の聲に、寂寥の國に引入れられるやうに感じ乍ら、夢に入るとき、其の冷たき夢の中に、怨恨憤怒の色を帶びて青ざめた父の姿が現はれて『公曉よ、吾敵を忘るゝな、必ず復讐して、わが心を休

めよ』と叫ぶ聲に、ハッと吾にかへつたこともあつたであらう。此の復讐の一念は、寐ても醒めても、容易に彼の胸を去らなかつた。

それにつけても、彼は、早く鎌倉に歸りたいと焦慮つた。彼の乳母の夫——三浦義村——から來た手紙を見ると、其の中に『早く鎌倉へ御歸りなさるのを御待ちいたします』と書いてある。彼は此の言葉に促されて、急に其の祖母政子の許に手紙を送つた『唯一度、鎌倉に歸りたい、それが衷心よりの望みです、祖母君の御顔さへ見たら、直ぐ僧房にかへります』と熱心な親みの深い心持を現はしてあつた。始終、公曉の事を想うて居た政子は、公曉が堪らなく可愛

いと見えて、義時と相談した上『鎌倉にかへることを許す』と云つて寄越した。公曉は、之を見て、ホッと一息した。彼の顔には、喜びの色が動いた。

公曉は、飛ぶやうにして、鎌倉に歸つた。彼は其の望み通り、其の儘、止まることになつて鶴岡別當に補せられた。彼は、政子の前に出ると、何時も、宗教についての信仰をシミ〴〵と話して、温柔を裝うて居た。けれども其の內部には、劍のやうに鋭い氣象を潛ませた。此の頃から、彼が義時、實朝に對する復讐の念が、一層、強くなつた。彼が

父の窮死も、又た現在に於ける不遇も『皆其の敵と目ざす二人の所爲である』と憤つた。將軍の地位は、如何しても、自分の物とならねばならぬ、それにもかゝはらず、憎むべき敵が、悠揚として、權力の中心を占めて、自分は、日蔭物のやうな生活を送らねばならぬのを、堪へ難き屈辱と思つた。

公曉が、平和な氣象を持つて居たら、彼は權力爭奪の悲劇を冷かに眺めて、單調な安らかな生活を爲し得たであらう。けれども彼は一度、定められた運命に反抗して、平和よりも寧ろ破壞を喜んだ。自己の生命を犧牲として、復讐の初一念を貫かうとした。彼は、唯其の準備にのみ心を傾

けて、徐ろに機會の來るのを待つて居た。

公曉の恐しい祕密は、何人も、之を知らぬやうに見えた。彼を『未來の危險』として畏憚したものはあつたが、其の心の底を鋭く見ぬいたのは、義時其の他一二の人であつたらう。けれども夫が何時爆發するか、誰も豫想し得なかつた。唯、義時のみは、之を嗅ぎ付けたやうである。公曉が、義時を倒し得なかつたのは、之がためであつた。

公曉が覘つて居た復讐の機會は、次第に彼に近付いた。當時、實朝は、源氏の運命が、次第に切迫するのを見て、

頻りに其の官位の昇進を望んで、終に右大臣となつた。其の拜賀の式が、正月二十七日――承久元年――鶴岡八幡に行はるゝことゝなつた。傳説によると、義時が、窃に使を派して、公曉に『實朝を刺殺しなさい、さすれば君は今にも將軍になることが出來ます』と煽動したとある。何れにもせよ、公曉は、此の機會を逃すまいと決心した。彼は、『今こそ復讐の一念を遂げて、父の亡靈を慰めねばならぬ』と、心から喜んだであらう。彼の眼は、恐しく輝いて、決死の氣が眉宇の間にほのめいたであらう。

復讐の日、公曉は人々の目を晦ますため、薄衣を被つて、婦人のやうに見せて居た。四邊が、暗澹たる色に包まれて、何となく不穩な物凄いやうな空氣が漲つて居た。心靜かに石段を下りて來る實朝の姿が、ほのかに闇の中に浮いて見えた。公曉は、片唾を呑みながら、其の次第に近づいて來るのを待つた。石段の中ほどに來たとき、何者か公曉に命ずるやうに『機會は今だ』と彼の心に囁いた。公曉は、ツッと實朝の前に現はれて、何氣なく其の顏をのぞくやうにした。其の途端、隱し持つた白刃を閃かすと思ふ間に、實朝めがけて鋭く打下した。此の不意の襲擊に、實朝は、驚きの眼を睜り乍ら、笏を以て辛くも白刃を受けとめた。けれ

ども公曉は、更に第二の太刀を打下して、其の場に實朝を斃して了つた、『わが父の敵、思ひ知れ』と罵つて心の凱歌を揚げた。

此の不意の出來事に、鎌倉中は、一大混雜を惹き起した。やがて實朝を刺殺したのは、公曉であると知れると、彼も亦、將軍を刺殺した罪の罰として誘殺せられた。

公曉は、運命に咀はれた孤兒であつた。彼が短い十九年の生涯は、彼に少しも滿足を與へなかつた。心にもない淋しい生活を强ゐられて、生の單調に度々倦怠を催すやうな

境涯に置かれた。けれども彼は、此の周圍の壓迫をはねのけて、其の復讐の意志を實現せんと努力した。その結果、彼が敵と覘ふ一人を倒したけれども、やがて恐ろしい咀ひの運命は、彼に迫つて短い悲みの幾ページかを殘して、亡き父の後を追ふに至つた。嗚呼悲痛なる年少貴公子の死!!

戀の靈魂

戀の靈魂

（靜御前）

「人生の遭逢ほど、不可思議なものはない。英雄と美姫とは、往々、運命の糸に操られて互ゐに其の全心を傾けあふことがある。ともすれば、幻滅に陷り易い人生は、之がために美の薄絹を纏うて、眩いやうな色彩を呈するのである。義經と靜御前との戀は、淋しい灰色に包まれた源氏の人々の中に、錦絲で織りなされたやうなロマンスを殘して居る」。

「靜御前の印象ほど、美しいものはない。戲曲に於て、花

の吉野山にさまよふ靜の優艶な風姿は、何人をも魅する力がある。彼の女は、唯、形の上のみ美しいばかりではなく、其の心も曉の露に匂ふ白い菫のやうに、清い美しさを持つて居た。彼の女が義經に對する戀は、純一で熱烈であつた。如何なる力も、之を他に誘惑することが出來なかつた。彼が最初に戀を捧げたのは、義經であつた。最後まで戀を捧げたのも、義經であつた。彼の女は、戀の靈魂そのものであつた。」

「靜御前に對する義經の執着は強烈であつた。彼が都落す

る時の心持は、あわたゞしいものであつたらう。彼の一身は、八方から包圍せられて、道をゆく一歩毎に、危險の感じを伴ふて居た。斯うした切ない零落の旅にも、尚ほ靜御前の事だけは、忘れられなかつた。義經は最終まで、之を伴ひたいと思つた。」

義經の熱烈な情緒は、靜の心にも共鳴を感じた。彼の女は、平家を亡ぼした大將軍が、こざかしい梶原の讒言によつて、落寞の境涯に陷つたのを、口惜しいと思つた。義經の胸の中は如何に堪へ難い不平に滿ちて居るであらうと、同感の淚は自然に袖を沾した。まして卑しい自分が、かくまでに大將軍から熱い情を受けて居ることに向つては、强

い感激に打たれざるを得なかつた。假令、途中の辛苦は、如何に多くとも『君の爲めならば』と健氣にも、全心を捧げて、義經に仕へた。

「行衛定めぬ旅の空、さしあたり吉野の山奥さして落ちゆく義經の淋しい姿は、靜にとつて重い哀愁の種であつた。靜の眼は、日毎に憔悴しゆく義經の頰の邊りを、いた〱しげに見やつた。ふりかゝつた苦き運命に對して愚痴一つ云はぬ義經の胸中は、察するに餘りあつた。

「白雪に埋もれた吉野山は、荒寥として、哀愁の Symbol のやうであつた。春の爛熟する頃は、薄紅の櫻花が、全山を彩どつて、風に舞ふ落花の吹雪は、せめて旅の心を慰め

たであらうものを。今は、櫻の樹も骨ばかり見せて、身を切るやうな風が、容赦なく吹きつけるのである。流石に氣丈夫な靜も、何となく、重い悲みが、全身に附き纏はるやうに思つた。」

「『吉野に行けば、何とかなるであらう』と思つて、漂泊して來た義經は、矢張、其の身を置くにところがなかつた。西に行かうか、東に行かうか、それさへ定めかねて、夢の中を辿るやうに、五日ばかりの漂泊を續けた。夜毎の夢の冷たさ、只さへ寒氣に苦められ勝ちてあるのに、さま〱

の思ひは、靜御前の眼を冴えさせるばかりであつた。流石に大將軍の義經は、斯うした場合にも、屈托の色は見せなかつたが、それでも、不安の色は眼にアリ〳〵と見えるやうに、靜は思つた。」

それにしても、靜は、纖弱な身として、何時までも、義經に從ふことが出來なくなつた。靜自身は、『何處までも』と決心して居たが、義經は敵の窮追が、激しくなつたので、止むを得ず、山伏の姿に扮して、奧州の方へ落ちてゆくことゝなつた。靜御前に對する執着は容易に消滅することが出來ぬのであるが、切迫した今の境涯は、終に別れを告げなければならなかつた。靜御前は義經から多くの金銀を受

けて雜色男を從へて、京までかへらねばならなかつた。

「靜は『之が永劫の別れではあるまいか』と思つた。奧州の山河は、京から非常に隔つて居る。彼の女には、それが索漠な色彩に乏しい山の奧のやうに考へられた。彼の女の熱烈な愛情も、之れからは、心の奧に秘めるより他はない。そればかりでなく、苛酷な運命は、何時、義經の危急を生ぜずとも、計り難い。『之が或は郎君の御顏の見納めか』と考へると、涙は自然に流れ出で、拂ふに由がなかつた。」

其の後、靜は、打萎れて雜色男を從へつゝ、京へ歸る途

に就いたが、間もなく、雜色男のために、多くの金銀を奪はれて了つた。彼の女は、重ね〳〵の不幸を見た。彼の女は、悄然として藤尾坂から權現堂へ下りて來た。此で放埓な惡僧のために捕へられた。『彼の女は、必度、義經の行衞を知つて居やう』と云ふので、罪もない身が、鎌倉まで送られることになつた。母の磯禪師も靜と共に引たてられた。

「鎌倉までゆく旅の淋しい味ひは、夜毎に深くなるばかりであつた。豫て聞き知つた名高い名所も、涙に曇る眼には映らなかつた。彼の女を迎へる總ての風光が、悲みの色に包まれて居るやうに見えた。飮食さへ、快く咽喉へは通らなかつた。」

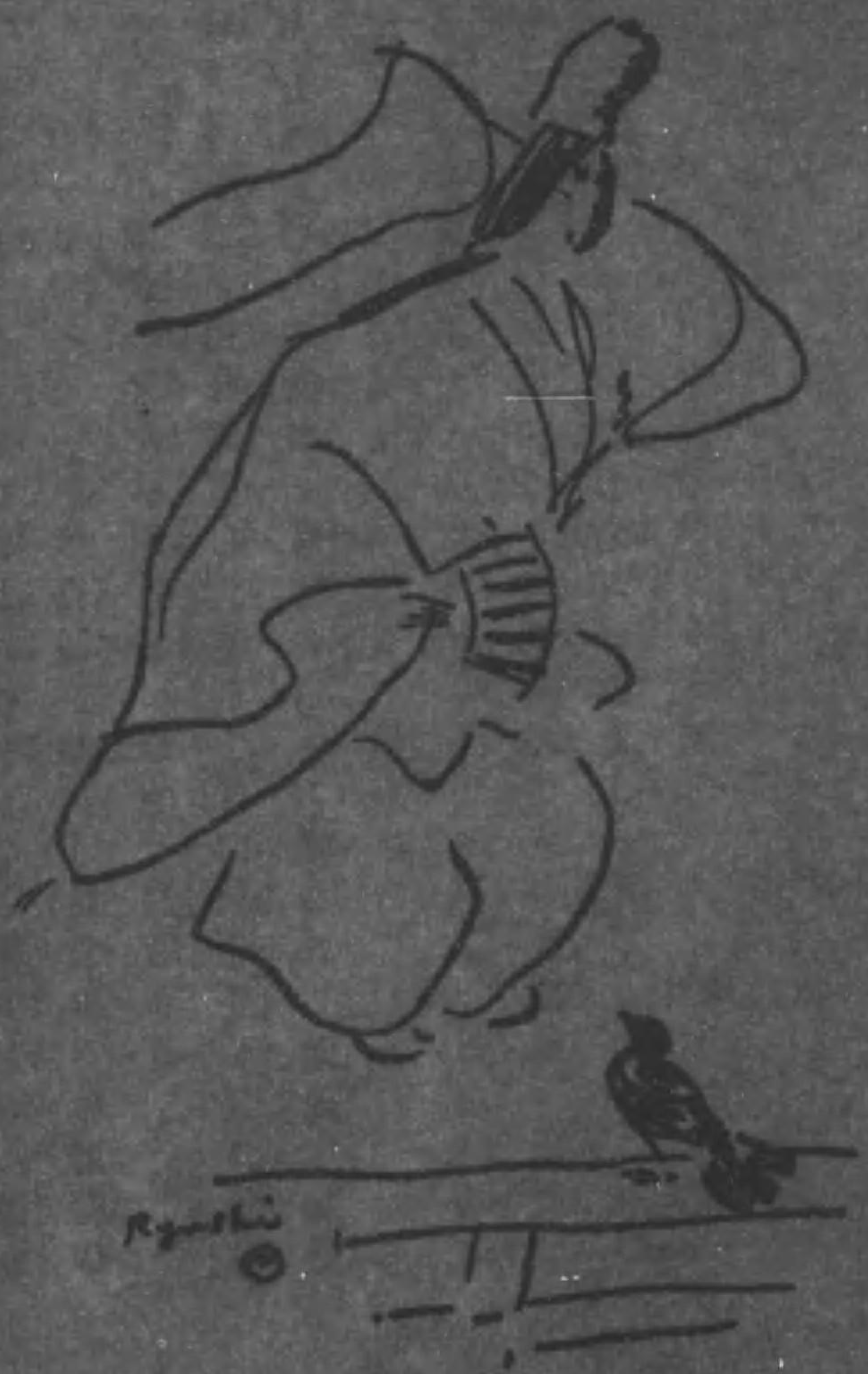
やがて靜は冷たい感じがする鎌倉に入つた。頼朝の命によつて、藤原俊兼、平盛時の二人が、靜に向つて義經の行衞を問ひ詰めた。けれども靜は、唯『知らぬ』とのみで他は云はなかつた。如何に威赫せられても、それ以上を云はうとしなかつた。僅かに吉野山に於ける義經の漂泊について語つたばかりであつた。鎌倉の武力も、靜の優しい心を左右することが出來なかつた。彼の女は、無事に京へ送りかへされる事になつて、暫く鎌倉に止つて居た。

靜御前の風姿は、武骨な鎌倉武士の間に、美の化身のや

うに傳へられた。女性に冷淡でない頼朝も、靜の並優れた舞を見たいと切に望んだ。けれども靜は、容易に之に應じなかつた。頼朝は意地強く、再三所望した。それでも、病氣と云つて、それをはねつけた。彼の女には、一種の清いProudがあつた。曾て大將軍義經の愛妾と云はれた身が如何に楚囚にひとしい身になつたとて、武骨な風流氣に乏しい鎌倉武士が列座する前に出て、屈辱に等しい振舞を見せたくはなかつた。彼の眼中には、素より鎌倉の權威を認めなかつた。女性としての誇りの前には、總てを犧牲とすることを恐れなかつた。

「其の中、鎌倉の春は、次第に暮れゆかんとした。桃も櫻も、次第にハラリ〳〵と散つた。目ざめるやうな若葉の色が、チラホラ梢の上に見え出した。晩春初夏の風物は、感じの淡い人にも、惱ましいおもひを起させる。況して靜は、其の戀人と別れて以來、久しくなつかしい消息にも接せず、何處を見ても親しみのない人々の間に居て、身も心も病みついたやうな淋しさを感じて居る。過去のさま〴〵な追想が、渦卷のやうに彼の女の胸に湧き出て、哀艶な晩春の風情に一層の沈鬱を覺えたであらう。そればかりではない、彼の女は、既に懷胎の身となつて居た」。

露光量違いの為重複撮影



頼朝と政子とは、靜の悩みも知らず顔に鶴岡八幡へ參詣した機會に、靜の舞を見ようと切望した。靜は、飽迄之を辭退したが、政子が『是非々々』と促すので、心はすゝまぬながらも、此の上、斷ることが出來ぬやうになつて、鎌倉武士の前に現はれた。

工藤祐經は、靜のために鼓を打ち、畠山重忠は、銅拍子を打つた。靜は、やがて、聲を出して歌ふた。

「よしの山峰の白雪ふみわけて
　入りにし人のあとぞこひしき

銀鈴のやうに響く彼の女の歌聲は、周圍の人々をして、水をうつたやうな靜かさに誘ひ入れた。彼の女は、思ひ入

露光量違いの為重複撮影

賴朝と政子とは、靜の惱みも知らず顏に鶴岡八幡へ參詣した機會に、靜の舞を見ようと切望した。靜は、悒泣之を辭退したが、政子が『是非々々』と促すので、心はすゝまぬながらも、此の上、斷ることが出來ぬやうになつて、鎌倉武士の前に現はれた。

工藤祐經は、靜のために鼓を打ち、畠山重忠は、銅拍子を打つた。靜は、やがて、聲を出して歌ふた。

「よしの山峰の白雪ふみわけて
　入りにし人のあとぞこひしき

銀鈴のやうに響く彼の女の歌聲は、周圍の人々をして、水をうつたやうな靜かさに誘ひ入れた。彼の女は、思ひ入

つたやうに、其の聲に力を入れた。

　しづやしづしづのをだまきくりかへし
　　昔を今になすよしもがな

斯う歌つて、蝴蝶のやうに舞ふ彼の女の艶容は、鎌倉武士を恍惚させた。天人が下界にさまよひ來て、雪白の羽衣を飜すのではあるまいかとさへ思はれた。」

　けれども靜の歌詞は、賴朝の怒りに觸れた。『叛逆者義經に對する熱烈な愛を歌詞に托するのは自分を見下げた仕方ぢや、殊に關東の萬歲を歌はないのは奇怪である』と憤つた。それでも政子が、靜の貞操を讃美した爲めに、賴朝の心も次第に和いで、彼の女は引出物として卯花重の衣裝を

賜つた。靜が、賴朝の權威を冷かに見て、女性の誇りを傷けなかつたことは、鎌倉武士に取つて一の驚きであつた。

「靜が賴朝の權威を恐れなかつたのは、彼の女の熱烈な戀の力によるのである。彼の女は義經と別れてからも、日每に郎君の俤を胸に描かない時はなかつた。明けても、暮れても、唯それのみ思つて居た。若し今生に一度でも、郎君の顏を見ることが出來たら、何物にもかへ難い歡喜であるとさへ思つた」

靜の胸には、賴朝が冷かな人として映つて居た。少しば

かりの讒言によつて、功勞の多い義經を、叛逆者と罵つて、其の生命を奪はんとする殘忍さを、咀ひたくなつた。殘忍な賴朝が、靜の歌詞を聞いて、如何なる態度に出るか、靜は其の恐怖を知らぬのではなかつたけれども、味氣なき生を續ける悲しみよりも、一切の煩惱執着から離れることが出來る歡びを得るには、死を擇ぶ方が宜いのである。彼の女は、寧ろ死を渴仰した位であつた。

「靜は、最早、何物をも恐れなかつた。彼は列座する鎌倉武士の恐し氣な顏を、斜に見やり乍ら、義經に對する愛慕を歌つたのである。此の時、彼の女の心は、唯、義經のみを思つて居た。其の他に何の感じも混じて居なかつた。澄

みきつた彼の女の聲は、一種の力強い情熱を帶びて響いた。其の情熱の高潮に對する時、急に不興氣になつた頼朝の顔は、彼の女に見えなかつた。彼の女は、吉野山で別れた義經の顔を幻のやうに浮べて見つめて居た。嗚呼、痛烈な戀の勝利!!!」

静は、一日も早く冷たい鎌倉を去つて京にかへりたいと思つた。何となく鎌倉を好まなかつた。けれども其の懷胎の子を產み落すまでは、歸ることを許されなかつた。それに静は鎌倉武士の中に、ともすれば、彼に懸想して、彼の

貞操を蹂躙しようとするものがあるのを、堪へ難く思つた。梶原景茂が、酒に醉うて、静に戯れた時、優しい彼の女は、急に形を改めた。『伊豫守樣は、鎌倉殿の御兄弟、妾は其の寵姫で御座ります、世が世なら、御家人の貴郎方が、顔さへ見ることが出來ぬのに、此の無禮な振舞をなさるのは、餘りで御座いませう』と云つた。景茂は此の一言に、浮氣の蟲を抑へられて、スゴ／＼引下つた。静には、何處か犯し難い權威があつた。彼の女は、鎌倉武士の前では、女王のやうな美と尊嚴とを失はなかつた。

「彼の女は、七月に入つて、可憐な男子を產み落した。それは義經の種で、彼の女には、なつかしい片見である。『せ

めて此の愛兒が成人したら』と喜びの色を浮べたのも、束の間に過ぎなかつた。若しそれが女子であつたら、靜に與へられたのであるが、男子である以上は、之を生存させることを許さぬとの事で、無殘にも、安達新三郎の手によつて、由比ケ濱に棄てさせる事になつた。愛兒を無理に奪ひ去られた時の靜の絶望と悲觀とは、永久に癒え難い傷を、彼の女の心に印象した。斯うした悲劇に逢つて、心細く其の母と共に京にかへる靜の淋しさよ。

靜の後半生は、悲しみの大波に弄ばれた難船者のやう

である。けれども彼の女は境遇の推移に苦められつゝも、義經に對する純一の愛を永く持續した。此の清き愛は、其の胸の底深く秘めて何人にも侵されなかつた。彼の女はそれを保護して、永久に朽させせぬ生命を保つた。假令、彼の女の生活は、滿足に終らなかつたにもせよ、戀の勝利は、彼の女をして、偉大なる女性とならしめた。其處に彼の女の美と權威とがある。

著作者　高須梅溪

大正三年八月廿一日印刷

大正三年九月　五　日發行

源氏の人々奥付其一

Keic. Yuki
28th Sept. '14

定價七拾錢

發行者　東京市京橋區南鍋屋町十二番地　增田義一
印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　笠間音次
發行所　東京市京橋區南鍋屋町十二番地　實業之日本社
電話京橋八七四、八七五、八七六、九八九
郵便貯金振替口座　三二六

源氏の人々奧付其二

東洋印刷株式會社印行

著者	書名	版	定價・郵稅
夏目漱石著	社會と自分	七版	定價壹圓五十錢 郵稅八錢
森鷗外著	十人十話	再版	定價八十錢 郵稅六錢
高濱虛子著	朝鮮	三版	定價壹圓 郵稅八錢
高濱虛子著	虛子文集	再版	定價四十錢 郵稅四錢
高濱虛子著	俳句とはどんなものか	七版	定價四十錢 郵稅四錢
黑頭巾著	趣味	再版	定價五十錢 郵稅六錢
竹久夢二著	繪入小唄集どんたく	七版	定價五十錢 郵稅四錢
森鷗外 島村抱月監修	世界名著文庫 第一編ホーマー物語 第二編シルレル物語 第三編ゲーテ物語	三版 再版 再版	定價各編四十錢 郵稅各編六錢

實業之日本社發行 六大定期刊行物

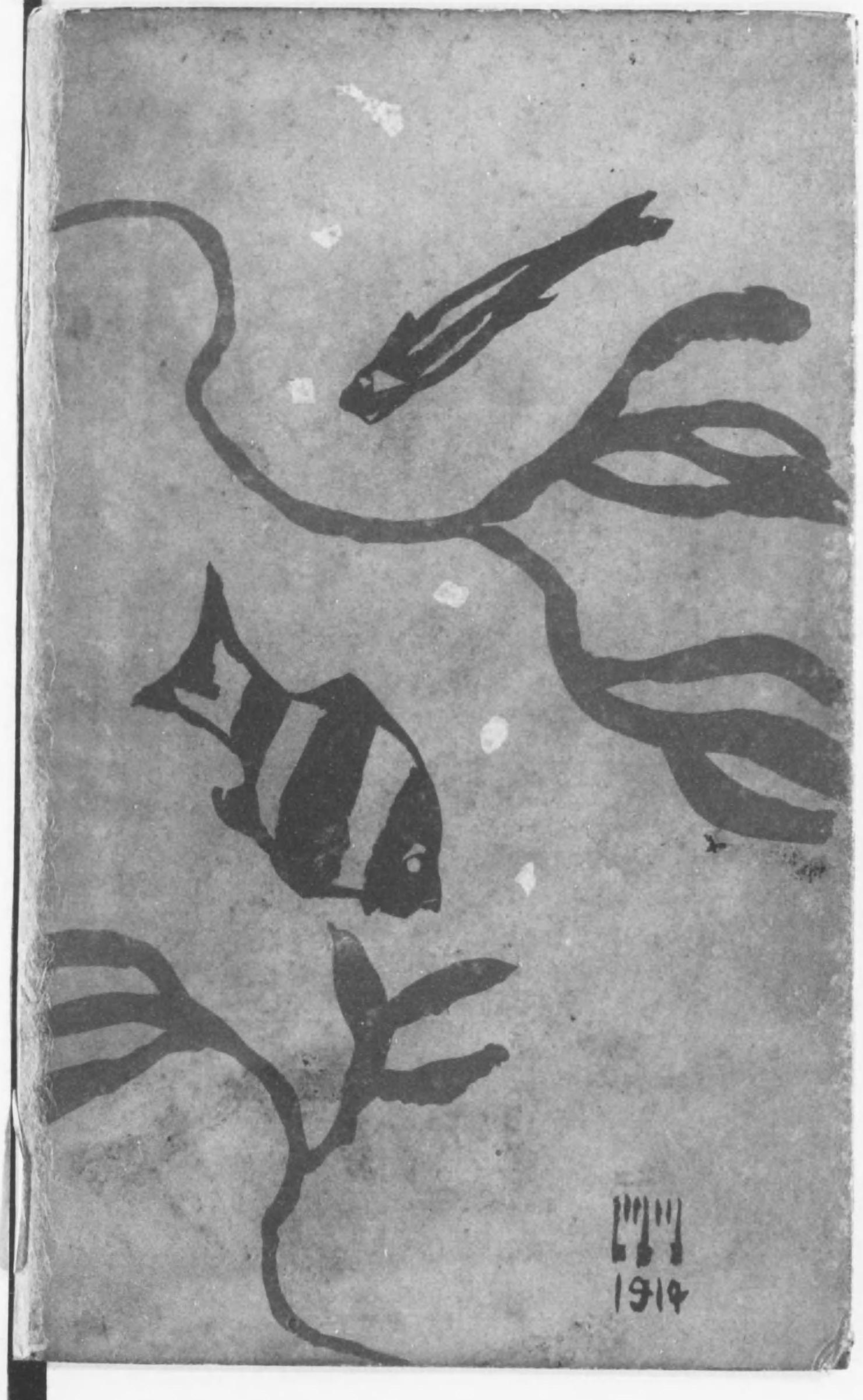
實業講習錄
▲毎月二回發行毎號二百餘頁▲一ヶ月(二冊)五十錢▲三ヶ月(六冊)一圓四十五錢▲六ヶ月(十二冊)二圓八十錢▲一ヶ年(二十四冊)五圓五十錢

實業之日本
▲一冊十一錢郵稅一錢五厘▲毎月二回一日十五日發行年二回增刊▲半年分增刊郵稅共一圓六十五錢(新年號を含む分は十錢增)▲一年分三圓廿錢

婦人世界
▲一冊十五錢郵稅一錢五厘▲毎月一回一日發行▲半年分增刊郵稅共一圓五錢▲一年分同二圓五錢

日本少年
▲一冊十錢郵稅一錢▲毎月一回一日發行▲春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分一圓卅五錢

少女の友
▲一冊十錢郵稅一錢▲毎月一回一日發行▲春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同一圓卅五錢

幼年の友
▲一冊十錢郵稅五厘▲毎月一回一日發行▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同一圓十錢

終